

平成 17 年度
「卒業生・就職先雇用者による教育評価」
報 告 書

平成 18 年 12 月

宮崎大学農学部

はじめに

この度、宮崎大学農学部においては初めての試みではありますが、「卒業生および就職先への教育効果アンケート」を実施いたしました。現在の本学農学部の教育システムを、将来に向けていかに改善していくか、その方策、取り組みの一環であります。

大学教員の業績評価といえば、これまでは研究評価にウエイトが置かれてきましたが、今後は、教育評価も十全であるべきとの状況下にあります。卑近な例を見ても外部資金の導入必至のなか、研究にシフトし過ぎて、肝心の教育機関としての本務である教育がおろそかになっていることも否定できない事実です。法人化、就中、法人経営という制約の中ではありますが、個々の教員が日常的にできることについては、謙虚に反省して、日々、改善していかなければなりません。

本アンケートは、本学が責任を持って受け入れた入学生時点から在学期間を経て卒業に至るまでの、まさに本学における、あるいは本学の果たした「教育効果」を検証するために実施されたものです。卒業生からは卒業後の就職先ならびにその他社会状況等を踏まえながらの率直な意見が届けられ、また、卒業生を受け入れていただいている企業、法人、団体等の就職先におかれても、今後の経済的社会的状況を加味した貴重な意見、提言をお届けいただきました。ここに改めて、卒業生ならびに卒業生を受け入れていただいている就職先の方々に本アンケートへのご理解とご協力を賜りましたこと対し、衷心より御礼申し上げます。

巻末の評価室長のコメントにありますように、本アンケートの実施により貴重な分析結果が得られました。このことを受け、とりわけ教員におかれては、文字通り「教員」の本務を自覚した上で、本報告書の内容・分析結果を吟味し、学生のため授業・教育内容の改善について、今後とも、より一層、努力されんことを切望いたします。

平成18年11月15日

宮崎大学農学部長

小八重 祥一郎

目 次

	ページ
平成17年度「卒業生・就職先雇用者による教育評価」報告書をまとめるに当たって	1
1. 卒業生への質問と回答	3
2. 雇用者への質問と回答	4
3. 全般的な回答の概要	5
4. 卒業生の回答の概要	5
5. 雇用者の回答の概要	5
6. 卒業生の個別意見	6
7. 雇用者の個別意見	6
8. 組織検討の視点	7
9. 学科の傾向	7
A. 食料生産科学科	8
B. 生物環境科学科	10
C. 地域農業システム学科	11
D. 応用生物科学科	12
E. 獣医学科	13

付図・付表

(i) 学科別アンケート集計結果（卒業生）	19
(ii) 学科別アンケート集計結果（雇用者）	27
(iii) 学生による回答の特記事項集計	33
(iv) 雇用者による回答の特記事項集計	34

平成17年度「卒業生・就職先雇用者による教育評価」報告書を まとめるに当たって

従来、どちらかといえば研究に重点が置かれてきた大学における業績評価は、教育にその重点を移さざるを得ない状況になってきている。背景から見ると、1960年には、18歳人口約200万人に対し大学への進学率はおよそ10%であった。その進学率が1964年にはおよそ20%にまで伸び、そして1976年には38.6%となり、その後、約10数年間35～36%を推移してきた。この間、大学入学者は約60万人に膨れあがり、大学はマス化・大衆化された。一方で、少子化も危惧されているが、1990年に36.3%だった進学率は、その後毎年1%を超える割合で増えつづけており、2004年には49.9%となっている。

かつては1割程度の、限られた希望者が、ある意味で、エリートとして大学から社会に旅立っていたが、現在ではクラスの半分が大学に進学する時代となっている。小・中学校や高等学校の全体的なレベルが格段に上がったわけではないことと考え合わせれば、大学での従来の教え方では、学生が授業について来られないのは当然である。つまり、大きな問題は進学率の増加に伴う平均的な学力水準の低下である。これに加えて、大学生自体の学習意欲・学問への関心や近い将来の社会生活につながる大学生活に対する心構えの低下も問題である。

大方の学生にとって進学は就職の準備である。どのような仕事に就くかは一生を大きく左右する。基礎教育、専門教育を通じて、自分の適性に合った仕事を見つけるためのキャリア教育の必要性が高まっており、高等教育を通じて高度な教養と知識を身に付けたり、技術を習得したりすることが大切なのはいうまでもない。同時に、学生が社会のさまざまな仕事や職種について学び、適切な職業選択に資することも高等教育の大事な役割となってきた。

一方で、男女の進学率をみると、大学（学部）への進学率は、平成14年度で女子33.8%、男子47.0%と差がみられるが、女子の短期大学への進学率（14.7%）を合わせると48.5%となる。女子の大学（学部）への進学率は近年上昇傾向にある一方で、短期大学への進学率は平成6年度の24.9%をピークに近年激減している。また、文系・理系等の専攻分野間における男女比率の偏りは小さくなってきており、大学院への進学率も年々上昇し、平成14年度では女性6.4%、男性13.2%となっている。

このような現状を分析する中で、期待する人材育成像を構築していかなければ、日々、進化する社会に応えられる人材を輩出していけなくなる。

その様な観点を踏まえ、宮崎大学農学部における教育システムを改善する取組みの一環として、これまでの学部教育の効果や問題点を明らかにするために、卒業生及び雇用者に対してのアンケートを、平成17年12月28日付けで送付し、別掲の回答数を得た。回収率等、十分とは云えない点もあるが、貴重な分析結果が得られており、今後の参考としていただきたい。

宮崎大学農学部評価室長
原 田 宏

卒業生へのアンケート送付数と回答数

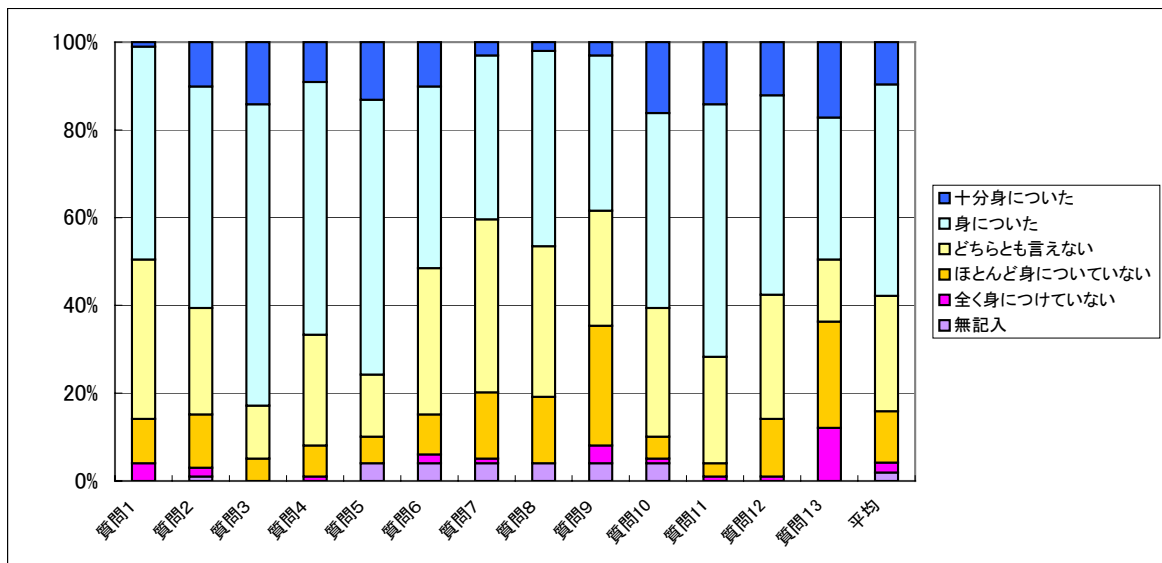
学科	第76回（通算） 平成16年3月卒	第77回（通算） 平成17年3月卒	送付数	回答数	回収率 （%）
食料生産科学科	64	58	122	29	23.8
生物環境科学科	60	56	116	20	17.2
地域農業システム学科	44	45	89	13	14.6
応用生物科学科	47	48	95	19	20.0
獣医学科	30	28	58	14	24.1
農林生産学科	6	1	7	0	0.0
生物資源利用学科	3	1	4	2	50.0
動物生産学科	0	1	1	0	0.0
無記名				2	
合計	254	238	492	99	20.1

雇用者へのアンケート送付数と回答数

学科	第76回（通算） 平成16年3月卒	第77回（通算） 平成17年3月卒	送付数	回答数	回収率 （%）
食料生産科学科	33	27	60	23	38.3
生物環境科学科	33	33	66	22	33.3
地域農業システム学科	24	26	50	18	36.0
応用生物科学科	30	26	56	27	48.2
獣医学科	27	26	53	19	35.8
農林生産学科	1	1	2	0	0.0
生物資源利用学科	0	0	0		
動物生産学科	0	0	0		
無記名				4	
合計	148	139	287	113	39.4

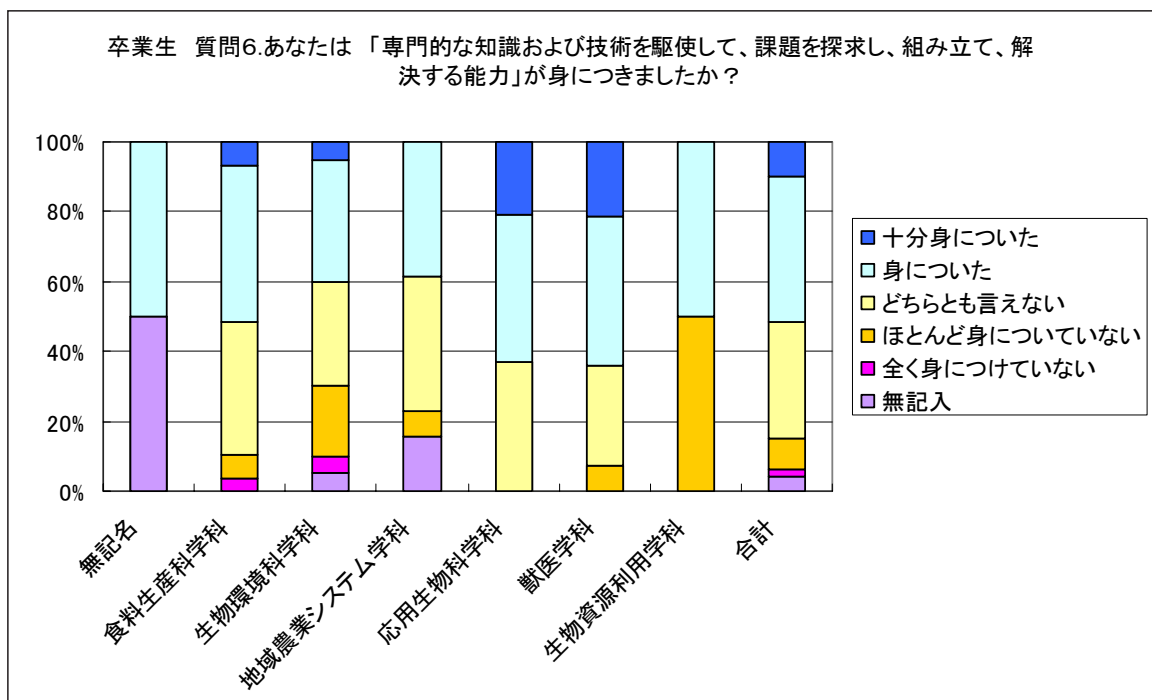
1. 卒業生への質問と回答

質問1. あなたは「地球的視点から多面的にものごとを考える能力とその素養」が身につきましたか？
質問2. あなたは「科学技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、および科学技術に携わる専門家が社会に対して負っている責任に関する理解」が身につきましたか？
質問3. あなたは「食料生産科学, 生物環境科学, 地域農業システム学, 応用生物科学, 獣医学に関する基礎知識」が身につきましたか？
質問4. あなたは「食料生産科学, 生物環境科学, 地域農業システム学, 応用生物科学, 獣医学の各関連科目の修得によって得られる専門知識」が身につきましたか？
質問5. あなたは「実験または調査を計画・遂行し, データを正確に解析・考察し, かつ説明する能力」が身につきましたか？
質問6. あなたは「専門的な知識および技術を駆使して, 課題を探求し, 組み立て, 解決する能力」が身につきましたか？
質問7. あなたは「実社会において経験する実務上の問題点と課題を理解し, 適切に対応する能力と判断力」が身につきましたか？
質問8. あなたは「社会の要求に対して様々な情報を収集・分析し, 対応策を企画する能力」が身につきましたか？
質問9. あなたは「日本語による論理的な記述力, 口頭発表力, 討議等のコミュニケーション能力および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力」が身につきましたか？
質問10. あなたは「自主的, 継続的に学習できる能力」が身につきましたか？
質問11. あなたは「与えられた制約の下で計画的に仕事を進め, まとめる能力」が身につきましたか？
質問12. 宮崎大学農学部で受けた教育に対する総合評価を次の5つの中からお選び下さい。
質問13. 就職や進路決定において, クラス担任から適切なアドバイスを受けましたか？



2. 雇用者への質問と回答

質問 1. 卒業生は「地球的視点から多面的にものごとを考える能力とその素養」を身につけていますか？
質問 2. 卒業生は「科学技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、および科学技術に携わる専門家が社会に対して負っている責任に関する理解」を身につけていますか？
質問 3. 卒業生は「食料生産科学, 生物環境科学, 地域農業システム学, 応用生物科学, 獣医学に関する基礎知識」を身につけていますか？
質問 4. 卒業生は「食料生産科学, 生物環境科学, 地域農業システム学, 応用生物科学, 獣医学の各関連科目の修得によって得られる専門知識」を身につけていますか？
質問 5. 卒業生は「実験または調査を計画・遂行し, データを正確に解析・考察し, かつ説明する能力」を身につけていますか？
質問 6. 卒業生は「専門的な知識および技術を駆使して, 課題を探求し, 組み立て, 解決する能力」を身につけていますか？
質問 7. 卒業生は「実社会において経験する実務上の問題点と課題を理解し, 適切に対応する能力と判断力」を身につけていますか？
質問 8. 卒業生は「社会の要求に対して様々な情報を収集・分析し, 対応策を企画する能力」を身につけていますか？
質問 9. 卒業生は「日本語による論理的な記述力, 口頭発表力, 討議等のコミュニケーション能力および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力」を身につけていますか？
質問10. 卒業生は「自主的, 継続的に学習できる能力」を身につけていますか？
質問11. 卒業生は「与えられた制約の下で計画的に仕事を進め, まとめる能力」を身につけていますか？
質問12. 卒業生が宮崎大学農学部で受けた教育に対する総合評価を次の5つの中からお選びください。



3. 全般的な回答の概要

すべての質問に対して、(十分)身につけていると回答した割合は、雇用者が66%、卒業生が58%と約6割以上が、教育効果があったと判断しているが、雇用者の方が卒業生より評価が8ポイント高くなっている。卒業生は大学に在籍していたため、評価が厳しくなったと思われる。

一方、(全く)ほとんど身に付いていないと回答したのは、雇用者が7%、卒業生が16%に留まっており、全体的には高評価であると言えるが、卒業生の方が雇用者に比べて評価が厳しくなっている。

以上の結果より、農学部教育の全般的な傾向としては、ある程度の成果を挙げているとは言えるが、雇用者にとっては70%弱の満足度に止まり、学生自身にとってはさらに不満が存在することが明らかとなった。

4. 卒業生の回答の概要

(十分)身につけていると回答した割合が60%を上回るのは、質問2～5、10～11である。これらの質問は、学部教育で提供される基礎知識や専門知識、卒論研究を通じて取得する分析および説明能力に関するものであり、基礎および専門教育はある程度教育効果を発揮していると考えられる。しかし、身につけていると回答したのは、基礎知識に関する質問3の83%が最高であり、専門知識の質問4については67%に留まっており、課題を残している。

一方、(十分)身につけていると回答した割合が60%を下回るのは、質問1、6～9、12、13であり、多面的な思考能力、多様な課題に対する解決能力、実社会との関連などの大学教育を社会につなげる点での評価が低くなっている。

また、質問9のコミュニケーション能力では、(全く)ほとんど身に付いていないと回答したのが35%と多くなっていること、質問13で就職や進路決定で適切なアドバイスを全く受けていないと回答したのが12%、ほとんど受けていないと回答した分を合わせると36%に達している。

5. 雇用者の回答の概要

(十分)身につけていると回答した割合が60%を上回るのは、質問1、3～5、7、10～12である。これらの質問は、学部教育で提供される基礎知識や専門知識、卒論研究を通じて取得する分析および説明能力に関するものであり、雇用者においても卒業生と同様に基礎および専門教育はある程度効果を発揮していると考えられる。

一方、(十分)身につけていると回答した割合が60%を下回るのは、質問2、6、8、9であり、多面的な思考能力、多様な課題に対する解決能力、実社会との関連などの、大学教育を社会につなげる点での評価が低くなっている。このように雇用者は、教育効果については卒業生とほぼ同様に判断している。

ここで注目すべき点は、質問2、3の社会に対する責任と基礎知識の習得についてであり、卒業生自身の判断よりも雇用者の評価が約10ポイント低くなっており、厳しく考えていることが伺えることである。専門知識、分析および説明能力、解決能力などについては雇用者と卒業生は概ね同じ判断をしているが、社会的責任と基礎知識では雇用者が卒業生自身の判断よりもかなり厳しく評価する傾向にあることに留意する必要がある。

6. 卒業者の個別意見

卒業者の個別の意見としては、数多くの意見が寄せられたが、概ねの意見は以下のように要約できる。

- ①3・4年生次の講義数を増やすなどして、専門的な部分を充実してほしい。
- ②専門教育を低学年時から実施してほしい。もっと早い時期から、専門の講義や実験を取り入れた方がよいと思う。
- ③基礎科目の内容をもっと充実させて欲しい。概要ばかりだったので、内容が薄い感じがする。
- ④実験・実習が少なすぎるので、もっと経験をつめるようにして欲しい。宮崎という地はフィールドに恵まれているので、実験・実習など、実際にフィールドでの活動を増やしたら、よいのではないか。
- ⑤企業や農家などともっと繋がりを持ち、社会に開けた大学になって欲しい。そうすることで、学生達も自分達が今やっている勉強の意義を“体感”できる。より実践的な大学になれば、宮大の魅力が増す。
- ⑥現在の仕事及び就職活動を通じて、発言力、口頭発表力が要求されているが、大学教育の中で力をつけることは出来なかった。
- ⑦もっと、就職についてアドバイスが欲しい。
- ⑧学科の名称からイメージする内容と実際に講義される内容に違いがあり、不満や矛盾を感じる学生が少なからず存在する。
- ⑨実験・実習の単位数が少ないため、卒業必要単位を満たす目的で、自由選択の講義を単位の取り易いものから取ることになり、研究室に入ってきて専門的な知識を持っていないことが多い。
- ⑩環境問題に関する職は、門が狭いので、もっとそれに対応できる資格なり、能力を身に付けることが必要である。
- ⑪選択科目がありすぎて、どれを履修すべきか迷った。また、履修モデルはあったが、そのモデル自体も、どれを選べばよいか曖昧であった。

7. 雇用者の個別意見

雇用者の個別の意見としては、以下のようなものがあるが、一般常識、基礎知識と処理能力、専門知識と実体験、プレゼンテーション能力、課題解決能力、人間性などをバランス良く身に付けている必要があることが強調されている。

- ①基礎的知識の上に、課題を探究し、組み立て、解決する能力などを教育していただきたい。
- ②一般教養における理解度及び応用力などが、少し低いと感じることがある。
- ③大学でゆとりのある授業を受けているせいか、数の計算等処理能力においては落ちているのではと感じる。
- ④精神的に「幼い」傾向が近年多いように感じる人が多いので、一般常識も含め、人間形成の育成にも努力していただきたい。
- ⑤プレゼンテーション能力を高める指導をしていただきたい。
- ⑥学内外の実習で実際に体験することや、実務者の話を聞くことにより、知識と現実の差を認識させ、社会に出た時、すぐに馴染めるように、卒業後の“社会・仕事の厳しさ”などを教育していただきたい。

- ⑦適材適所を大切に考えての就職斡旋が大切である。
- ⑧農学部には5学科あるみたいですが、獣医学科を除く他の学科の内容が、学科名だけではみえません。
- ⑨「農学」全般についての基礎知識不足や組織の中での個人のあるべき姿が理解できない場合がある。
- ⑩「社会性」「協調性」等を身に付けさせる全人教育を展開していただきたい。

8. 組織検討の視点

平成17年度に行われた本アンケートを、組織検討の観点からまとめると次のようである。

- ①雇用者、卒業者ともに、専門性と社会性のある教育、実験・実習などの体験型学習、表現力の育成などへの配慮が必要であることを指摘している。
- ②卒業生の評価の高い学科は獣医学であり、卒業先の出口を考えながら、しっかりと教育が行えていることが伺われる。
- ③逆に生物環境科学がもっとも低く、学生の視点に立って、改革する必要がある。
- ④現在の学科名では、学生の入口と出口がはっきりしていないという問題点がみられた。
- ⑤獣医師国家試験に対しては、現在のカリキュラムでも良いことを示している。
- ⑥逆にJABEEについては良好な結果とは言えず、この継続や新規導入については再考する必要がある。
- ⑦フィールド教育、実践教育をさらに推進する必要がある。

9. 学科の傾向

本アンケートの学科別回答数は、卒業生からの回答が14～29件（14.6～24.1%）、雇用者からの回答が19～27件（33.3～48.2%）（いずれも旧学科卒業生分を除く）であり、学科の傾向について必ずしも確定的な結論を述べることは難しいが、回答内容から以下のような傾向がみられた。

- 「卒業生用の質問1：地球的観点から多面的にものごとを考える能力とその素養」が身についたと考える卒業生の多い学科は、地域農業システム学である。
- 「質問2：科学技術の影響や効果ーに対する理解」で良い評価を挙げているのは、応用生物科学、地域農業システム学である。
- 「質問3-4：各専門に関する基礎知識」に関する2つの質問では、獣医学が高く、生物環境科学が低い。
- 「質問5：実験、データの考察力」に関する質問では、獣医学が高く、生物環境科学が低い。
- 「質問6：専門的な知識の駆使と解決能力」では、地域農業システム学、生物環境科学が低い。
- 「質問7-8：実務上の判断力、企画能力」が身についたと考えるのかでは、地域農業システム学、生物環境科学が低い。
- 「質問9-10：コミュニケーション能力」「自主的に活動できる能力」については、生物環境科学が高い。
- 「質問11：計画的に仕事を進める能力」については獣医学が高い。
- 「質問12：受けた教育の総合評価」では、生物環境科学が劣っているようである。
- 「受けた講義や実習が業務に活かされているか」では、生物環境科学が劣っているようである。

- 「履修モデル」に関する2つの質問では4学科中食料生産科学が良い得点を得ている。
- JABEEでは役立ったと答えた割合は2割強である。
- 獣医学では、教育カリキュラムが国家試験に役立ったと答えたのは6割強である。
- 卒業者の自己評価のアンケートをとりまとめると、自己評価の高い割合がもっとも高かったのは獣医で、もっとも低かったのは生物環境科学である。逆に、自己評価の低い割合がもっとも少なかったのは応用生物科学で、もっとも多かったのは生物環境科学である。

以下に、学科別にアンケート集計結果の要約を示す。

A. 食料生産科学科

(1) 卒業者用アンケートの集計結果の要約（有効回答者数：29名）

質問1（素養）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の0-35%であり、学部平均（1-49%）に比較して低かった。

質問2（責任）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の0-55%であり、学部平均（10-51%）に比較してほぼ同等であった。

質問3（基礎知識）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の14-62%であり、学部平均（14-68%）に比較してほぼ同等であった。

質問4（専門知識）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の7-52%であり、学部平均（9-58%）に比較してほぼ同等であった。

以上、質問1-4（素養・責任感・基礎および専門知識）において、回答者の半数以上が学科教育の成果を認めているが、この比率は学部全体の平均とほぼ同等であった。

質問5（計画・遂行、データ解析・考察と説明能力）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の10-66%であり、学部平均（13-63%）とほぼ同等であった。

質問6（課題の探求・解決能力）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の7-45%であり、学部平均（10-41%）とほぼ同等であった。

質問7（適応力と判断力）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の3-41%であり、学部平均（3-37%）とほぼ同等であった。

質問8（情報の収集・分析・対応能力）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の3-41%であり、学部平均（2-44%）とほぼ同等であった。

質問9（コミュニケーション能力・国際的コミュニケーション基礎能力）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の3-31%で、学部平均（3-35%）とほぼ同等であった。

質問10（自主能力）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の10-48%であり、学部平均（16-44%）とほぼ同等であった。

質問11（計画の実行力）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の14-52%であり、学部平均（14-58%）に比較してほぼ同等であった。

以上、今後の主な課題としてコミュニケーション能力（質問9）のレベルアップが挙げられる。

総合評価（質問12）は55%が「十分満足している」または「満足している」と回答しているものの、「ほとんど満足していない」または「全く満足していない」という回答も21-3%あり、クラス

担任の指導（質問13）についても「十分受けた」「ある程度受けた」と回答した卒業生は62%であり、学部平均（50%）よりも高く評価されていた。また、業務に生かされている講義・実習（質問14）については「あった」と回答した卒業生は45%であり、学部全体の平均（50%）とほぼ同等であった。回答者の90%が履修モデルを「きちんと履修」あるいは「ある程度履修」していた。「十分役に立った」あるいは「ある程度役に立った」と回答した学生は69%であった。

自由記載（質問14）としては、農林畜水産業の現場で活かされる教育と研究（開かれた大学としての地域貢献）に対する指摘が目立った。

(2)雇用者用アンケートの集計結果の要約（有効回答者数：23名）

質問1（素養）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の9-48%であり、学部平均（6-46%）とほぼ同等であった。

質問2（責任）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の9-35%であり、学部平均（7-43%）に比較してやや低かった。

質問3（基礎知識）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の9-57%であり、学部平均（18-55%）に比較してほぼ同等であった。

質問4（専門知識）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の4-52%であり、学部平均（16-50%）に比較してほぼ同等であった。

以上、質問1（素養）についての評価は、卒業生による評価に比べてやや高い評価であった。質問2-4（責任感・基礎および専門知識）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は、学部平均および卒業生の回答よりも低かったものの、60%が教育効果を認めていた。

質問5（計画・遂行、データ解析・考察と説明能力）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の9-48%であり、学部平均（15-51%）に比較してほぼ同等であった。

質問6（課題の探求・解決能力）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の22-26%であり、学部平均（15-40%）に比較してやや低かった。

質問7（適応力と判断力）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の26-44%であり、学部平均（17-50%）とほぼ同等であった。

質問8（情報の収集・分析・対応能力）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の17-22%であり、学部平均（12-43%）に比較して低かった。

質問9（コミュニケーション能力・国際的コミュニケーション基礎能力）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の17-26%であり、学部平均（12-44%）に比較して低かった。

質問10（自主能力）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の13-65%であり、学部平均（27-61%）に比較してやや低かった。

質問11（計画の実行力）については、「身についた」、「十分身についた」の回答は全体の22-57%であり、学部平均（19-60%）とほぼ同等であった。

総合評価（質問12）は57%が「十分満足している」または「満足している」と回答、学部平均（18-50%）に比較して高かった。

以上、質問5-11（能力育成）については、卒業生による評価と同等の評価であった。とくに、判断力（質問7）、コミュニケーション能力（質問9）、自主性（質問10）、計画性（質問11）につ

いては評価が高かった。総合評価として、約半数が教育成果を認めていた。

(3)総括

本アンケートの有効回答が少数であったが、解析結果の傾向として、卒業生、雇用者共に、約半数が教育効果を認めていた。卒業生の評価は学部平均よりやや低い傾向の部分もあり、学科として考慮する必要がある。雇用者の評価が高いことは、卒業生に対する今後の期待度も含まれているかと推察された。

B. 生物環境科学科

(1)卒業生用アンケートの集計結果の要約（有効回答者数：20名）

質問1-5（素養・責任感・基礎および専門知識）において回答者の50-60%が「身についた」あるいは「十分身についた」と回答しており、半数以上が学科教育の成果を認めているが、この比率は学部全体の平均よりやや低かった。

質問5-11（能力育成）については、「身についた」あるいは「十分身についた」の回答は全体の30-70%であり、学部全体の平均とほぼ同等であったが、計画・説明能力（質問5）、課題探求（質問6）、判断力（質問7）の評価が学部平均に比較してやや低かった。逆に、コミュニケーション能力（質問9）、自主性（質問10）については、比較的评价が高かった。

総合評価（質問12）は50%が「十分満足している」または「満足している」と回答しているものの、「ほとんど満足していない」という回答も25%あり、クラス担任の指導（質問13）についても「十分受けた」「ある程度受けた」と回答した卒業生は50%に満たなかった。また、業務に生かされている講義・実習については「あった」と回答した卒業生は35%であり、学部全体の平均（50%）より低かった。

回答者の90%が履修モデルを「きちんと履修」あるいは「ある程度履修」していた（質問9）。しかし、これを「十分役に立った」あるいは「ある程度役に立った」と回答した学生は55%であった。自由記載（質問14）としては、実習等フィールド教育の充実（7件）および環境系科目の充実（5件）に関する指摘が目立った。

(2)雇用者用アンケートの集計結果の要約（有効回答者数：22名）

質問1-2（素養・責任感）については、「身についた」あるいは「十分身についた」の回答は30%弱であり、学部平均および卒業生の回答よりも低かった。

これに対して、質問3-4（基礎および専門知識）は、60-80%が教育効果を認めており、特に専門知識については卒業生よりも高く評価されていた。

質問5-11（能力育成）についての評価はほぼ学部の平均レベルにあり、卒業生による評価と同等あるいはやや高い評価であった。とくに、自主性（質問10）については評価が高かった。

総合評価として、学生と同様に約半数が教育成果を認めていた。

(3)総括

本アンケートの有効回答が少数であり、卒業生・雇用者共に、約半数が教育効果を認めていた。

卒業生からの有効回答は比較的意識の高い学生によると推察されるが、その25%（5名）が農学部で受けた教育を「ほとんど満足していない」と回答した点については、学科として真摯に受け止めるべきであろう。また、卒業生の評価と雇用者の評価が若干異なった項目については、両者の要求事項の違いを反映するものであり、今後の教育システムの改善における検討材料とすべきである。

C. 地域農業システム学科

(1) 卒業生用アンケートの集計結果の要約（有効回答者数：13名）

質問1-5（素養・責任感・基礎および専門知識）において回答者の60-80%が「身についた」あるいは「十分身についた」と回答しており、学科教育の成果を認めている。特に質問1「地球的観点から多面的にものごとを考える能力とその素養」で「身についた」と回答した割合は、80%に達しており、農学部で最も高くなっている。

質問5-11（能力育成）については、「身についた」あるいは「十分身についた」の回答は全体の30-70%であり、学部全体の平均とほぼ同等であった。課題探求（質問6）、判断力（質問7）の評価が学部平均に比較してやや低く、コミュニケーション能力（質問9）、自主性（質問10）については、学部で最も低くなっていた。

総合評価（質問12）は60%が「十分満足している」または「満足している」と回答しており、「ほとんど満足していない」という回答は10%以下であり、学部の平均とほぼ同じ割合となっている。

クラス担任の指導（質問13）についても「十分受けた」「ある程度受けた」と回答した卒業生は50%に満たなかった。また、業務に生かされている講義・実習については「あった」と回答した卒業生は60%であり、学部全体の平均（50%）より高かった。

所属学科の履修に関する質問では、回答者の80%が履修モデルを「きちんと履修」あるいは「ある程度履修」していた。しかし、これを「十分役に立った」あるいは「ある程度役に立った」と回答した学生は60%以下であった。また、無記入が20%程度有り、他学科の食料生産科学、生物環境科学との違いが目立った。

卒業生の自己評価では、高い評価が40%、中と低評価が30%づつとなっている。応用生物学と同等の高評価を受け一方で、低評価が30%に達することは、卒業生のニーズに対応できていない部分があることを示している。

自由記載（質問14）としては、卒業生の個別意見として、「地域農業システム学科は、選択科目がありすぎて、どれを履修すべきか迷った」、「モデルはあったが、そのモデル自体もどれを選べばよいか曖昧であった。」との意見があった。

(2) 雇用者用アンケートの集計結果の要約（有効回答者数：18名）

質問1-3（素養・責任感・基礎知識）については、「身についた」あるいは「十分身についた」の回答は60%であり、学部平均とほぼ同じ割合であった。

これに対して、質問4（専門知識）は、40%程度しか教育効果を認めておらず、学部で最も低くなっており、雇用者は本学科の卒業生に厳しい判断を下している。

質問5-11（能力育成）についての評価はほぼ学部の平均レベルにあり、自主性（質問10）、計画

性（質問11）については評価が高かった。

雇用者の総合評価では、高い評価が20%、中が50%、低評価が30%づつとなっている。卒業生による自己評価にくらべて、雇用者の方が厳しい評価であった。

(3)総括

本学科は、農林経済、地域農学、農業土木、農業機械を包含するため、学科の性格上、どうしても幅の広い教育内容を同時並行的に実施する必要がある、一般論としての教育科目に偏る傾向がある。そのため、専門のおよび実務的な教育が不足していることは、雇用者が卒業生の自己評価に比べて厳しい診断を下していることから明らかであり、今後の課題である。

D. 応用生物科学科

(1)卒業生用アンケートの集計結果の要約（有効回答者数：19名）

質問1-4（素養・責任感・基礎および専門知識）において回答者の53-95%が「身についた」あるいは「十分身についた」と回答した。特に質問3「基礎知識が身についたか」という質問に対し、95%が「身についた」あるいは「十分身についた」と回答し、学科教育の高い成果が認められた。いずれの質問においても、この比率は学部全体の平均を上回った。

質問5-11（能力育成）については、「身についた」あるいは「十分身についた」の回答は全体の37-95%であった。特に質問5「実験または調査を計画・遂行し、データを正確に解析・考察し、かつ説明する能力」が身につきましたか」に対して95%が「身についた」あるいは「十分身についた」と回答し、学科教育の成果が認められた。しかし判断力（質問7）の評価が学部平均に比較してやや低かった。

質問12（総合評価）は63%が「十分満足している」または「満足している」と回答し、学部全体の平均を上回った。クラス担任の指導（質問13）については「十分受けた」「ある程度受けた」と回答した卒業生は50%に満たず、学部平均よりやや低かった。また、業務に生かされている講義・実習については「あった」と回答した卒業生は58%であり、学部全体の平均（50%）を上回っている。JABEE認定に対応した教育プログラムで学んだことが、就職後の実務に役立ったか」という質問に対しては、卒業して間もないにもかかわらず21%がある程度役立ったと回答した。

自由記載（質問14）としては、実験実習が実務に生かされているという回答が多くあった。

(2)雇用者用アンケートの集計結果の要約（有効回答者数：22名）

質問1-2（素養・責任感）については、「身についた」あるいは「十分身についた」の回答は52-59%であり、学部平均の回答を上回った。しかし質問2「科学技術が社会に及ぼす影響や効果、および科学技術に携わる専門家が社会に対して負っている責任に関する理解を身につけているか」については、卒業生よりも低く評価されていた。

質問3-4（基礎および専門知識）については、80%以上が教育効果を認めており、専門知識の修得についても卒業生とほぼ同様の評価であった。

質問5-11（能力育成）についての評価はほぼ学部の平均レベルと同等かそれ以上であった。卒業生自身による評価と比較すると同等あるいはやや高い評価であった。とくに、自主性（質問10）

については評価が高かった。

総合評価として、78%が教育成果を認めていた。この数字は卒業生の評価（63%）より高かった。

(3)総括

本アンケートの卒業生、雇用者の有効回答数はそれぞれ19、22と少数であったが、寄せられた結果解析の限りにおいては、卒業生、雇用者のそれぞれ63%、78%が教育効果を認めており、いずれも学部平均ポイントを上回っていた。雇用者のポイントが高いことは、卒業生に対する期待度も大きいことを示している。

E. 獣医学科

質問1～11の項目については、「広い視野を持って思考する能力」、「専門的能力」、「課題解決能力」、「コミュニケーション能力」の4つのカテゴリによって分類し直し、それ以外の質問（質問1～11以外）項目と分けて以下に考察した。

(1)卒業生用アンケートの集計結果の要約（有効回答者数：14名）

「広い視野を持って思考する能力」

このカテゴリには、質問1および質問2が対応する。質問1および質問2に対して、獣医学科卒業生が「身についた」あるいは「十分身についた」と答えたのは、それぞれ全体の35.7%および57.1%であった。対応する学部全体の平均は、それぞれ49.5%および60.6%であり、「広い視野を持って思考する能力」を教育することに関しては、学部の平均よりやや低いか、ほぼ同様の結果となった。

「専門的能力」

このカテゴリには、質問3、質問4、質問6、質問7が対応する。質問3、質問4、質問6および質問7に対して、獣医学科卒業生が「身についた」あるいは「十分身についた」と答えたのは、それぞれ全体の92.9%、92.9%、64.3%および57.1%であった。対応する学部全体の平均は、それぞれ82.8%、66.7%、51.5%および40.4%であり、「専門的能力」を教育することに関しては、学部の平均より上回った結果となった。

「課題解決能力」

このカテゴリには、質問5、質問8、質問10、質問11が対応する。質問5、質問8、質問10および質問11に対して、獣医学科卒業生が「身についた」あるいは「十分身についた」と答えたのは、それぞれ全体の85.7%、50.0%、57.1%および85.7%であった。対応する学部全体の平均は、それぞれ75.8%、46.5%、60.6%および71.7%であり、「課題解決能力」を教育することに関しては、学部の平均よりやや高いか、ほぼ同様の結果となった。

「コミュニケーション能力」

このカテゴリには質問9が対応する。質問9に対して、獣医学科卒業生が「身についた」あるいは「十分身についた」と答えたのは、全体の35.7%であった。対応する学部全体の平均は、38.4%であり、「コミュニケーション能力」を教育することに関しては、学部の平均とほぼ同様の結果となった。

以上から獣医学科の教育において、「専門的能力」の育成はある程度行われていること、しかしながら、「広い視野を持って思考する能力」を育成することについては、不十分であることが読み取れる。これは獣医学科の教育の現状を考えると、少ない教員数で国家試験科目を教えているため、国家試験の出題頻度が高い、専門的な部分に偏って教育していて、国家試験の出題頻度が低い、動物と動物との関係、動物と植物との関係、動物と自然・環境との関係など、広い視野に立って物事を考えることを育成することがおろそかになっていることを表しているのかも知れない。

「課題解決能力」を涵養しているかどうかの部分では、学部の平均より幾分高い評価を得ていた。これは、獣医学科が6年制であり、他学科より課題解決能力を涵養できる時間が長いことを勘案すると、獣医学科が特別に優れた課題解決能力の育成を行っているとは即断できない。

「コミュニケーション能力」については、農学部全体として評価が低かった。これには、質問項目が「日本語による論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力」となっていたため、回答者が国際的に通用するコミュニケーション基礎能力の部分に重きを置いて回答したことが関係している可能性が考えられる。そう考えると、現在農学部では、国際的に通用するコミュニケーション能力の育成は積極的には行われていないので、妥当な結果とも言える。

質問12の「宮崎大学農学部で受けた教育に対する総合評価を次の5つの中からお選び下さい。」に関しては、獣医学科と農学部全体との間ではほぼ同様の結果となっていた。したがって、前述の「課題解決能力」を涵養しているかどうかの部分については、やはり特別に獣医学科が優れた教育を行っているのではなく、教育に割ける時間が他学科よりも長いために、獣医学科が幾分高い評価を得た結果になった可能性が高い。

質問14に関しては、獣医学科の方が他学科よりもやや良いとの結果になった。しかし、獣医師として活躍する分野を考慮すると、当該学科のある科目がある分野と特に密接に関わっているためにこのような結果になったと思われ、特別に獣医学科が優れた教育を行っているとは考え難い。

「獣医学科における教育カリキュラム（講座専修実験、卒業論文を含む）は、「獣医師国家試験」の受験に役立ちましたか？」の質問に関しては、64.3%の回答者が「ある程度役立った」あるいは「十分役立った」と答えた。この数字はそれほど高いようには受け止められないが、近年、宮崎大学獣医学科の国家試験合格率は、全国的には高い方にあるので、この数字については、他大学における同様のアンケート結果と比較しない限り、考察することは難しい。

(2)雇用者用アンケートの集計結果の要約（有効回答者数：19名）

「広い視野を持って思考する能力」

質問1および質問2に対して、獣医学科卒業生を雇用している回答者が「身につけている」あるいは「十分身につけている」と答えたのは、それぞれ全体の68.4%および78.9%であった。対応する学部全体の平均は、それぞれ55.2%および49.6%であり、「広い視野を持って思考する能力」を教育することに関しては学部の平均より高かった。

「専門的能力」

質問3、質問4、質問6および質問7に対して、獣医学科卒業生を雇用している回答者が「身につけている」あるいは「十分身につけている」と答えたのは、それぞれ全体の100%、94.7%、84.2%および78.9%であった。対応する学部全体の平均は、それぞれ72.6%、66.4%、54.9%および66.4

%であり、「専門的能力」を教育することに関しては、学部の平均より高い結果となった。

「課題解決能力」

質問5, 質問8, 質問10および質問11に対して, 獣医学科卒業生を雇用している回答者が「身につけている」あるいは「十分身につけている」と答えたのは, それぞれ全体の84.2%, 73.7%, 94.7%および89.5%であった。対応する学部全体の平均は, それぞれ66.4%, 54.9%, 87.6%および78.8%であり, 「課題解決能力」を教育することに関しては, 学部の平均より高かった。

「コミュニケーション能力」

質問9に対して, 獣医学科卒業生を雇用している回答者が「身につけている」あるいは「十分身につけている」と答えたのは, 全体の78.9%であった。学部全体の平均は, 56.6%であり, 「コミュニケーション能力」を教育することに関しては, 学部の平均より高かった。

卒業生の仕事ぶりを見て現状の獣医学科の教育を判断した雇用者からは, 「広い視野を持って思考する能力」, 「専門的能力」, 「課題解決能力」, 「コミュニケーション能力」のいずれの категорияにおいても, また, 質問12においても高い評価が得られた。このように評価していただけたことは, 素直に大変喜ばしい。しかしながら卒業生からの評価は, 決して高いものではなかった。雇用者側の評価と卒業生の評価が必ずしも一致していたわけではなかった原因には, 母集団の数が小さいこと, 今回対象とした卒業生は卒後3年以内であり, 雇用者と年齢の開きが大きかったこと, 対象とした雇用者の分野の割合が, 実際の就職先の割合に対応していなかったことなどが考えられる。最終的にはこのような点も考慮して, 調査を行ってから, 評価を下す必要がある。

(3)総括

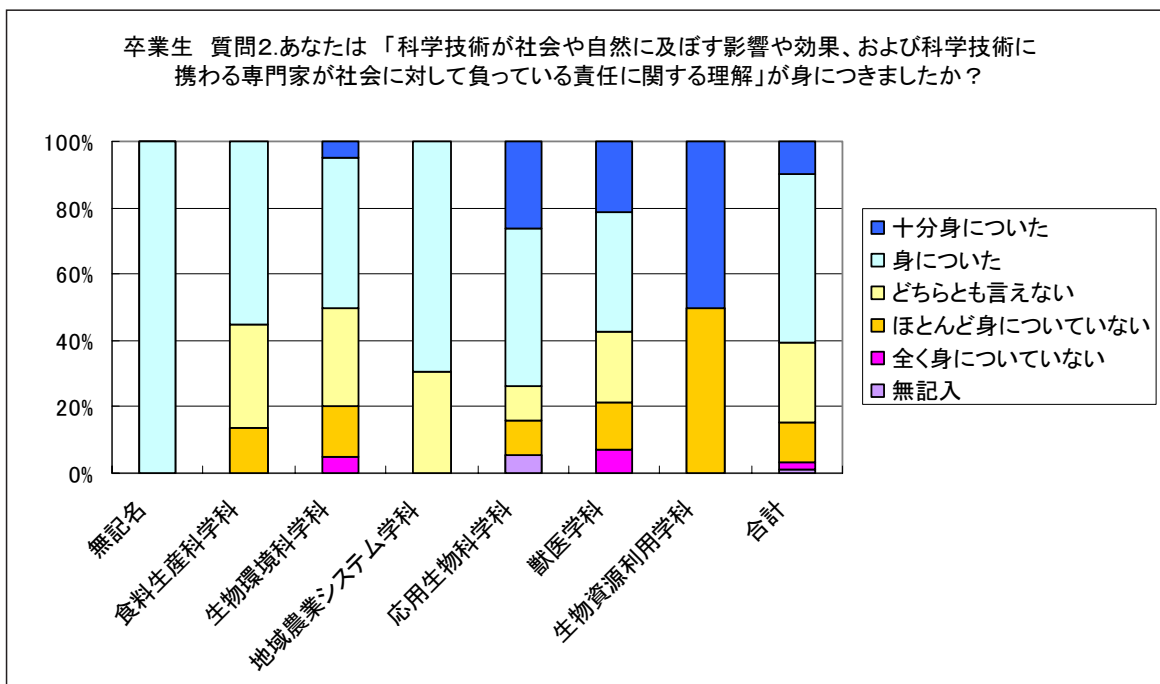
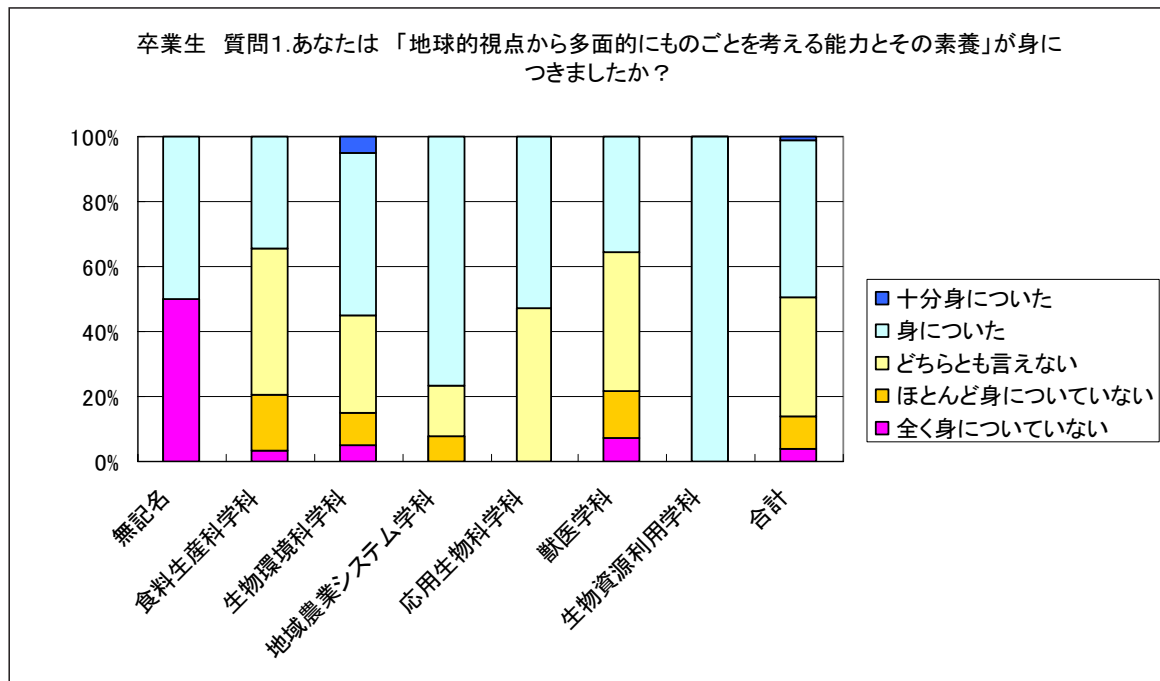
本アンケートの有効回答が少数であったが, 卒業生および雇用者共に, 半数以上が教育効果を認めていた。しかし, 卒業生の評価と雇用者の評価が異なった項目, 特に「広い視野を持って思考する能力」の育成に関しては卒業生が満足していない結果となっており, 今後改善する必要がある。さらに, 母集団の数を増やして継続的に調査を行うことで, 本学科が抱えている問題点が一層明確になることも考えられ, そのことも今後に向けて取り組む必要があると思われる。

付図・付表

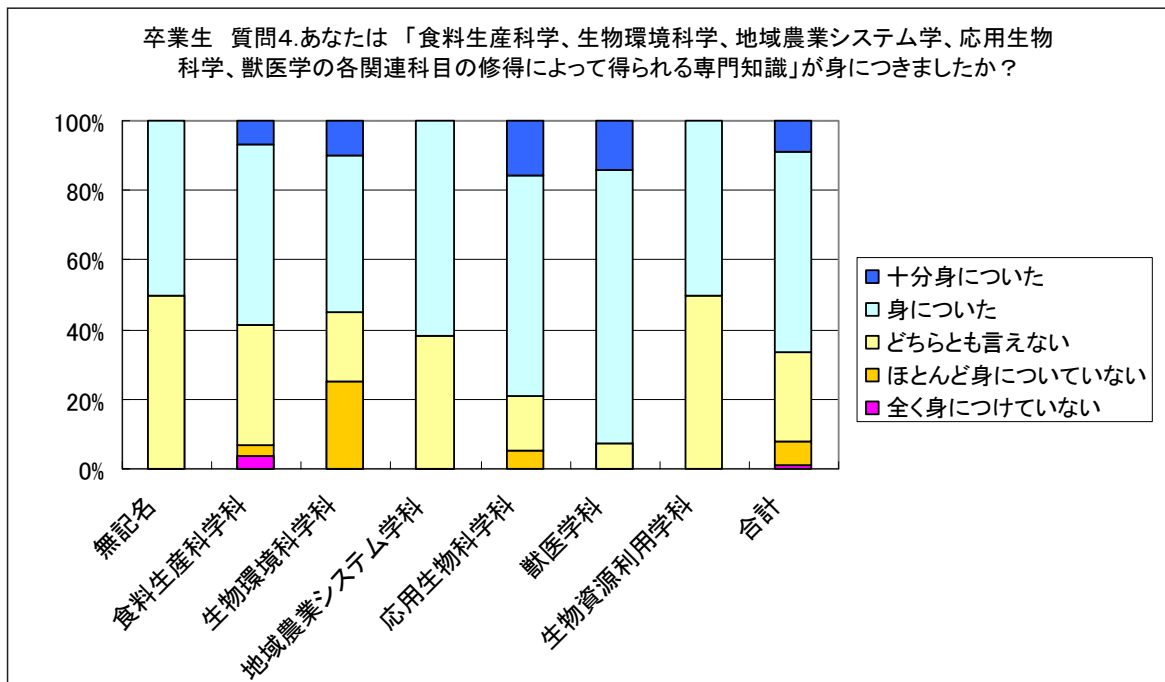
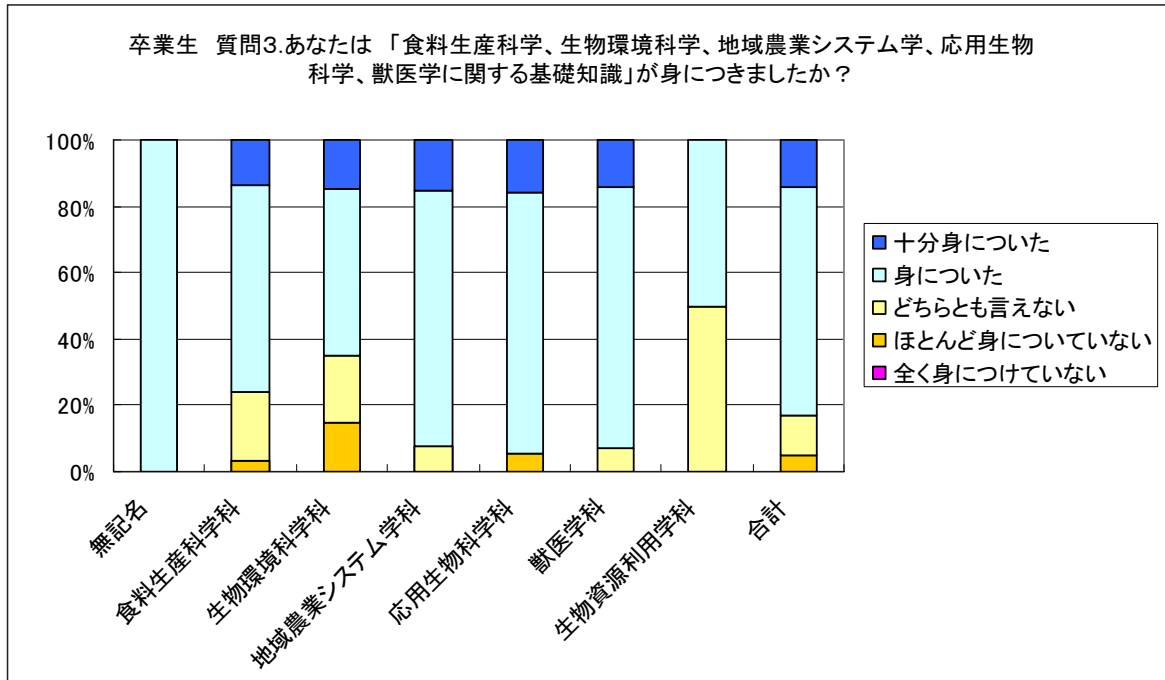
- (i) 学科別アンケート集計結果 (卒業生)
- (ii) 学科別アンケート集計結果 (雇用者)
- (iii) 学生による回答の特記事項集計
- (iv) 雇用者による回答の特記事項集計

(i) 学科別アンケート集計結果 (卒業生)

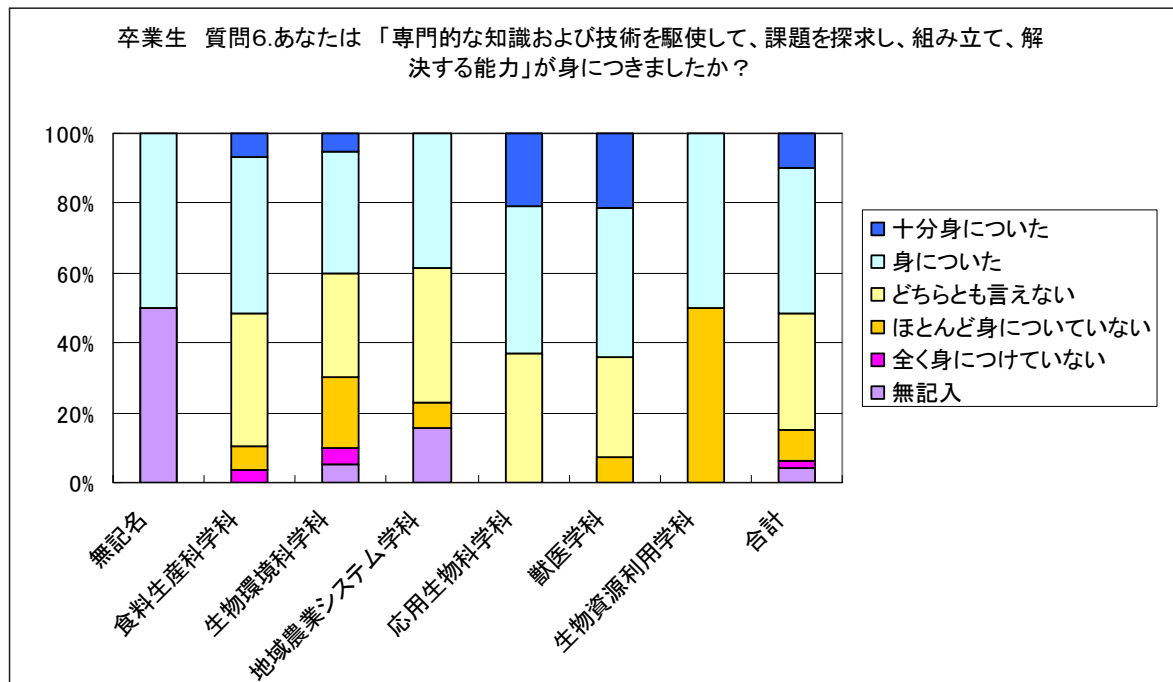
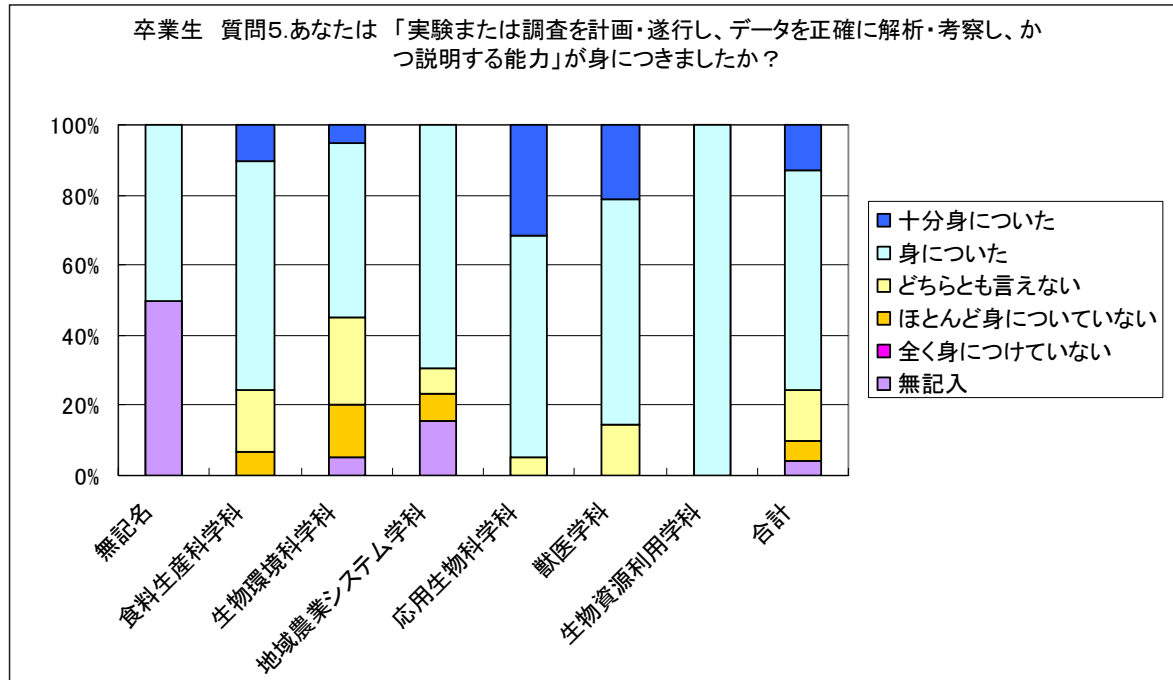
学部共通質問



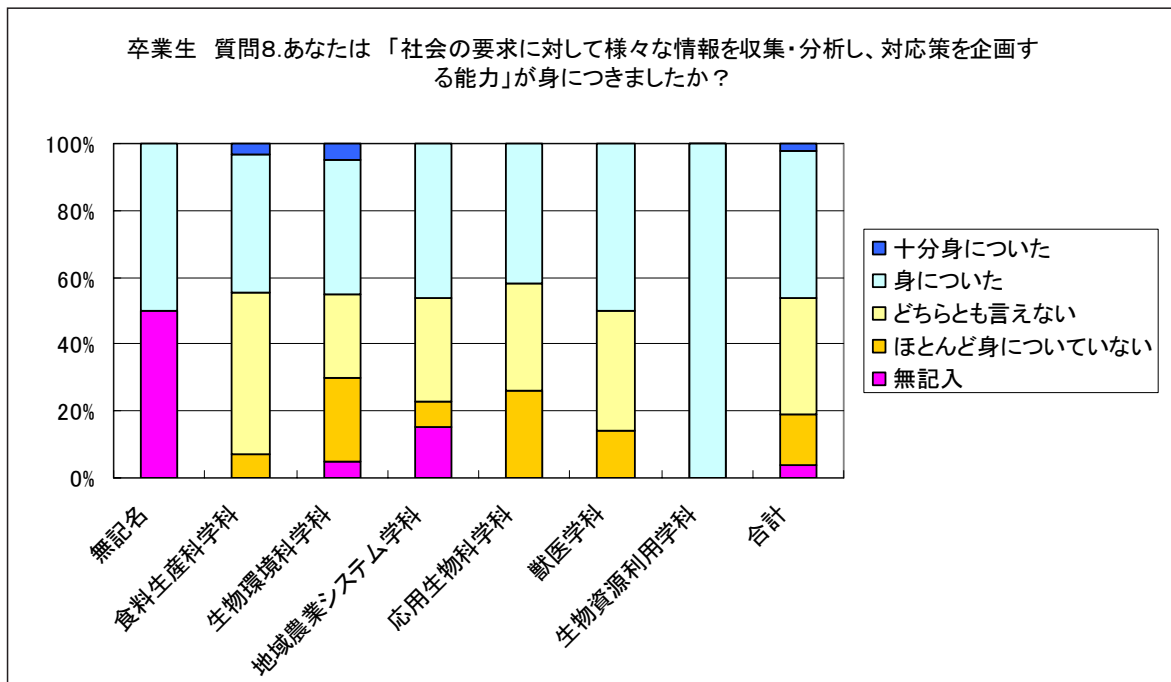
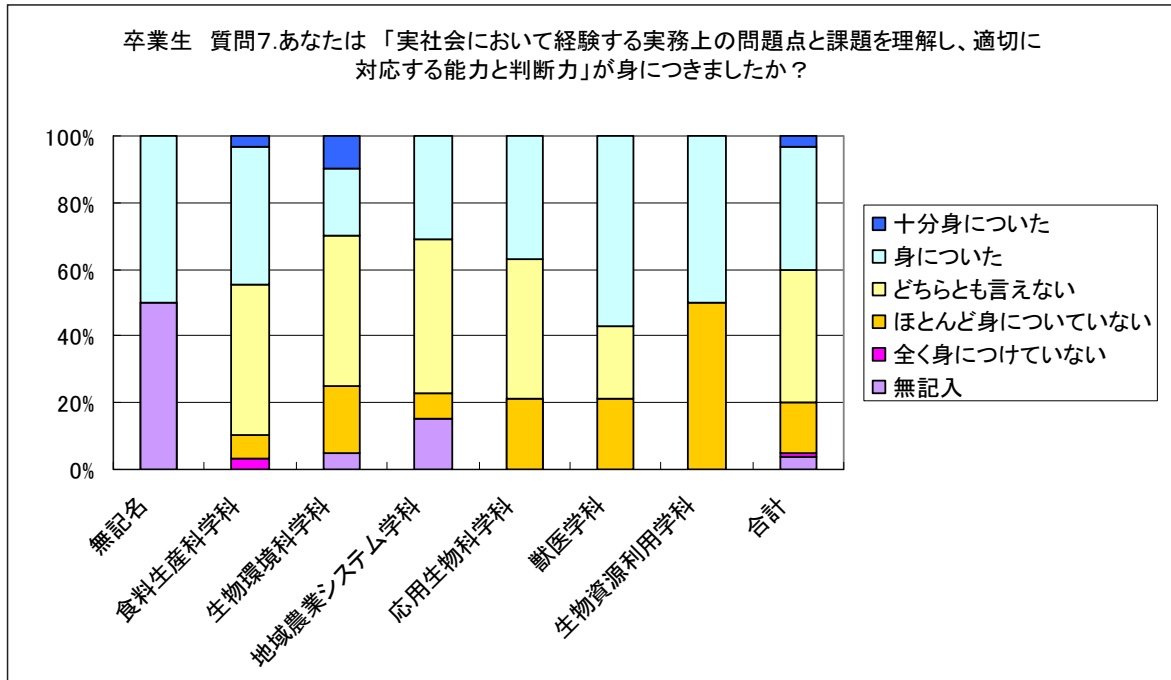
学部共通質問



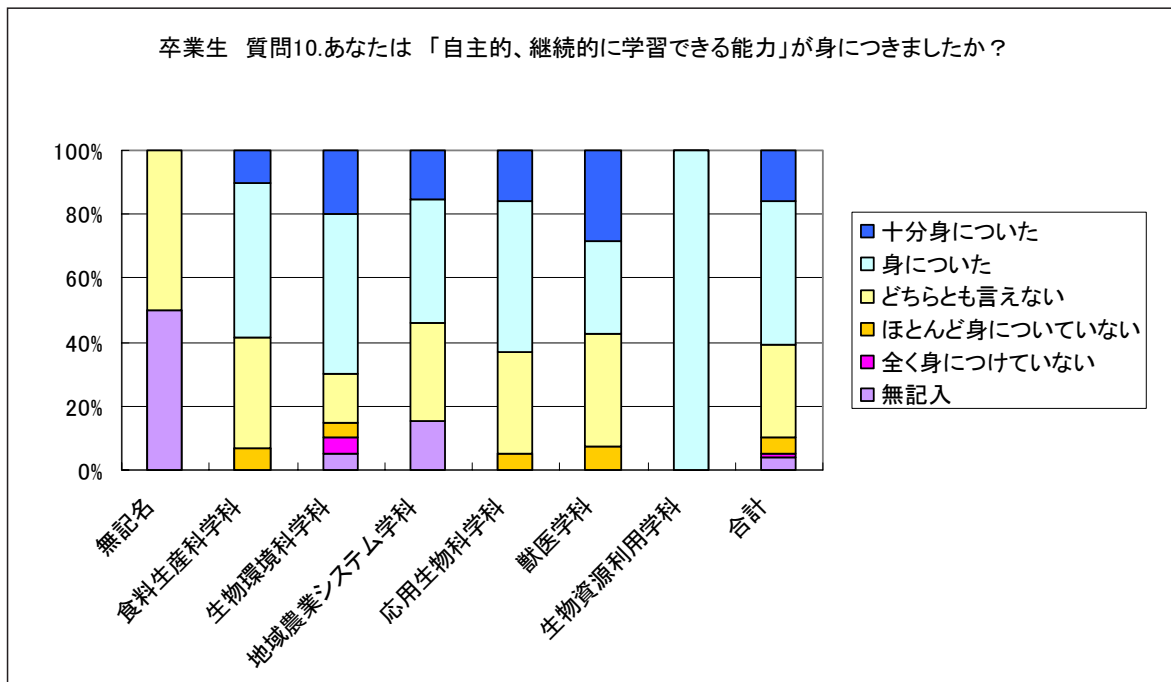
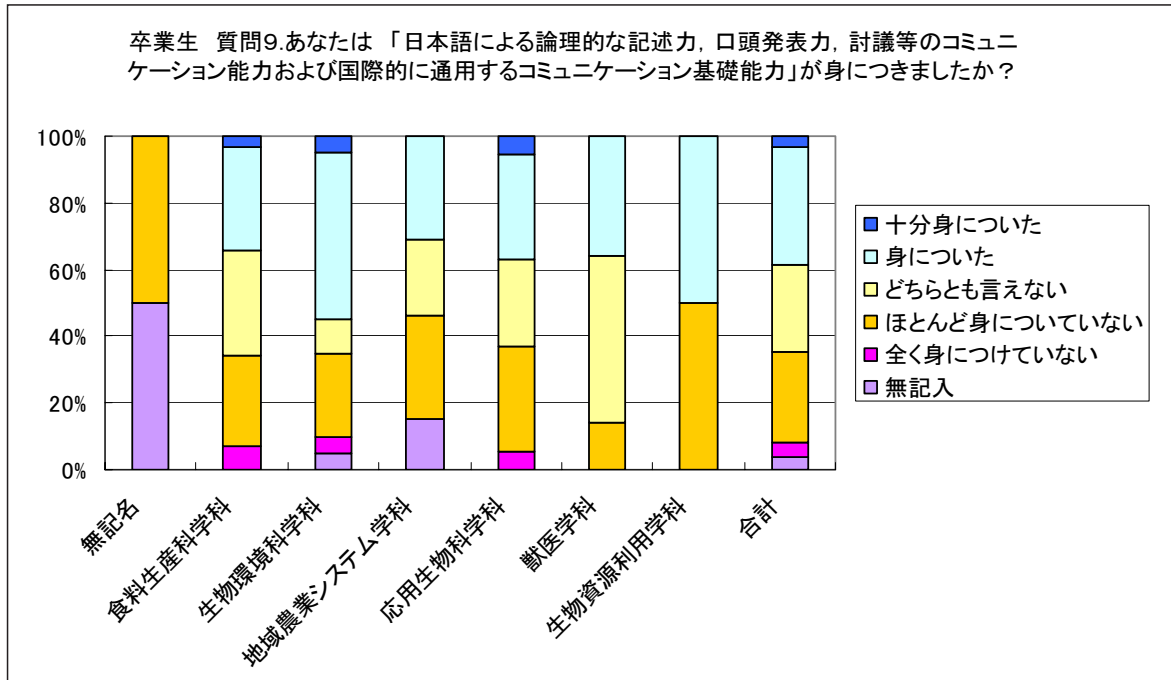
学部共通質問



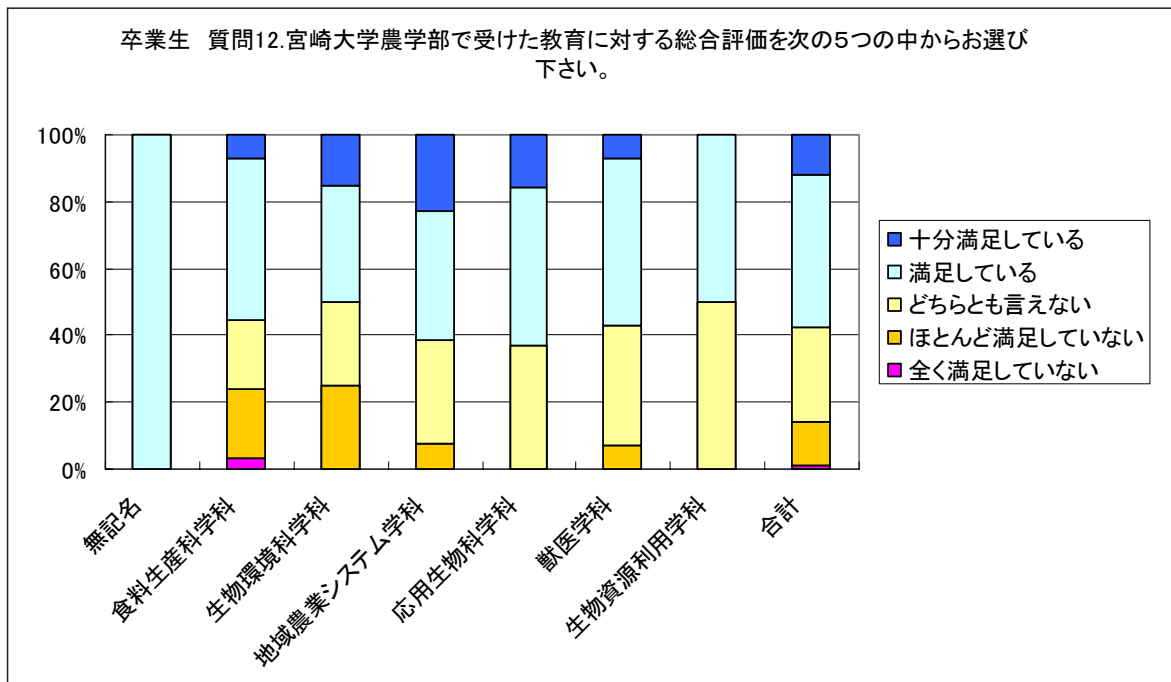
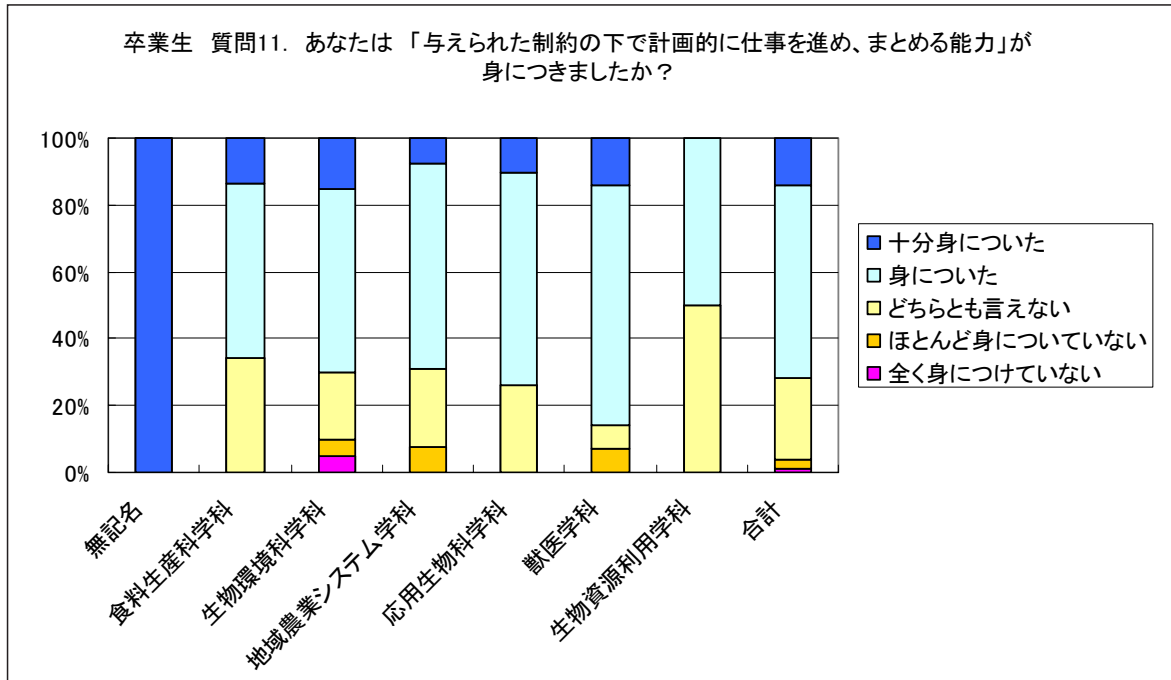
学部共通質問



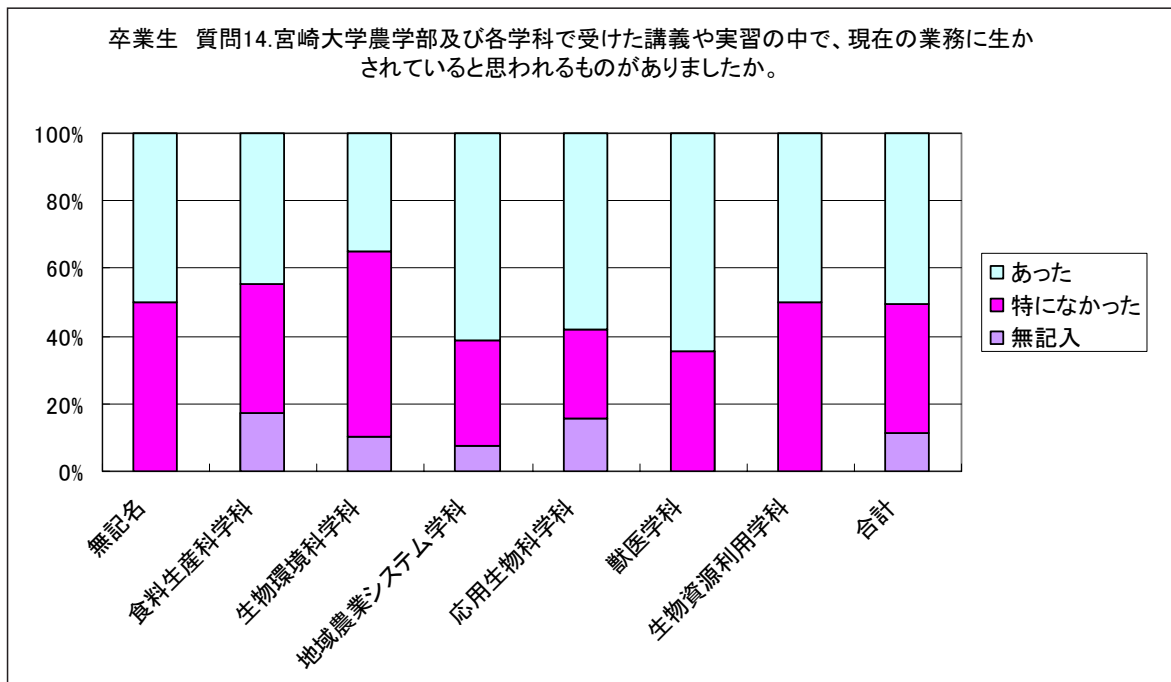
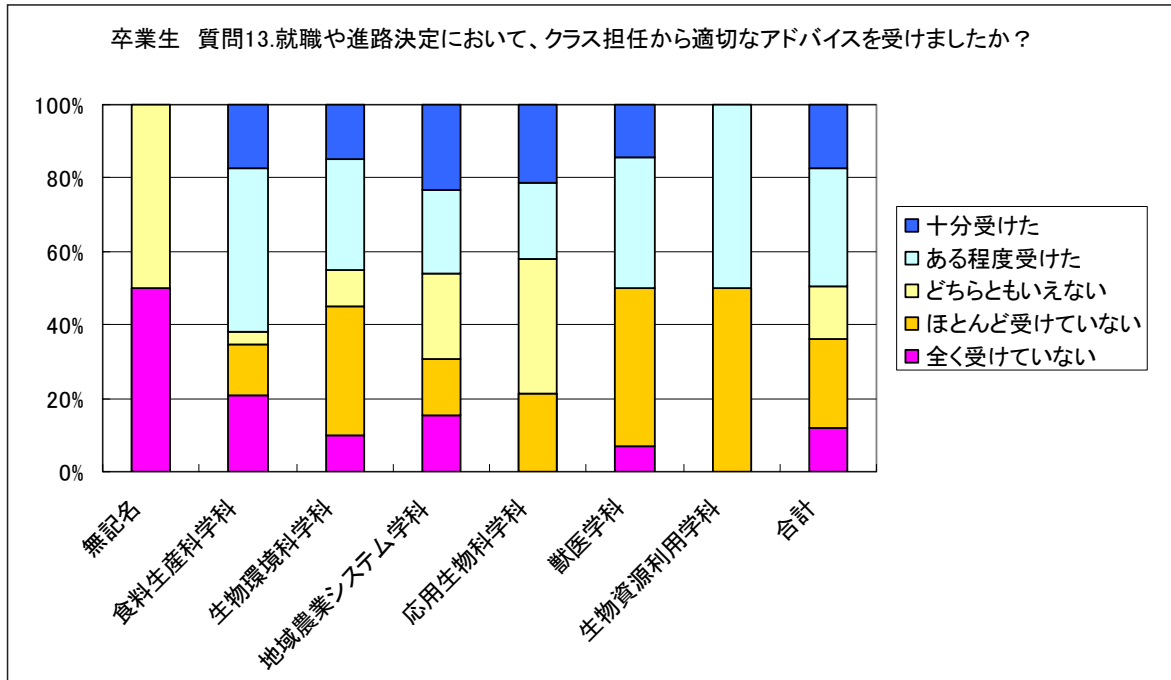
学部共通質問



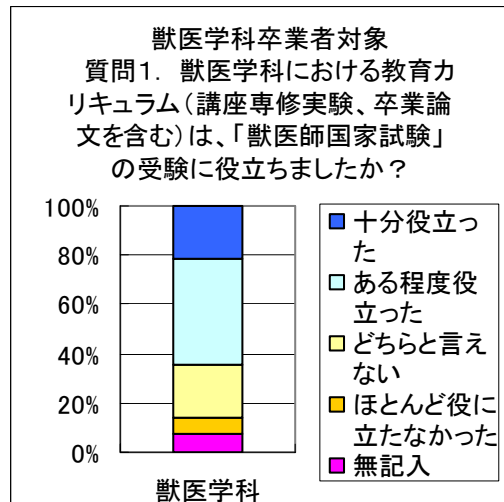
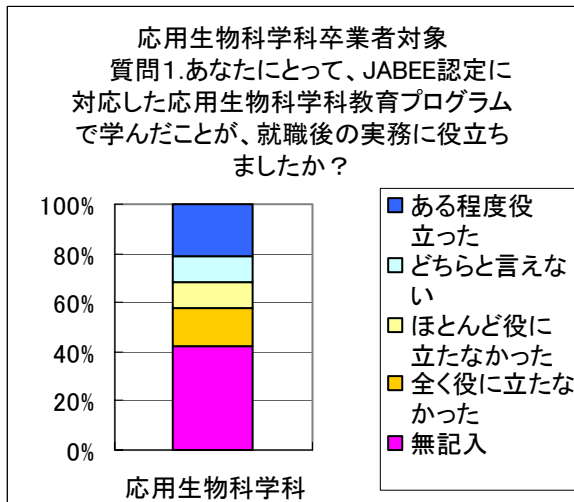
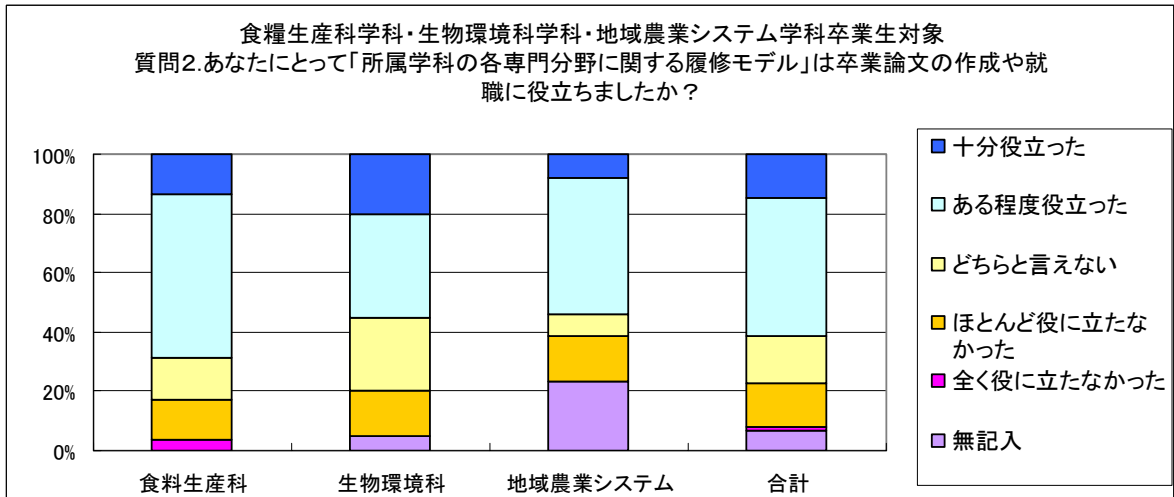
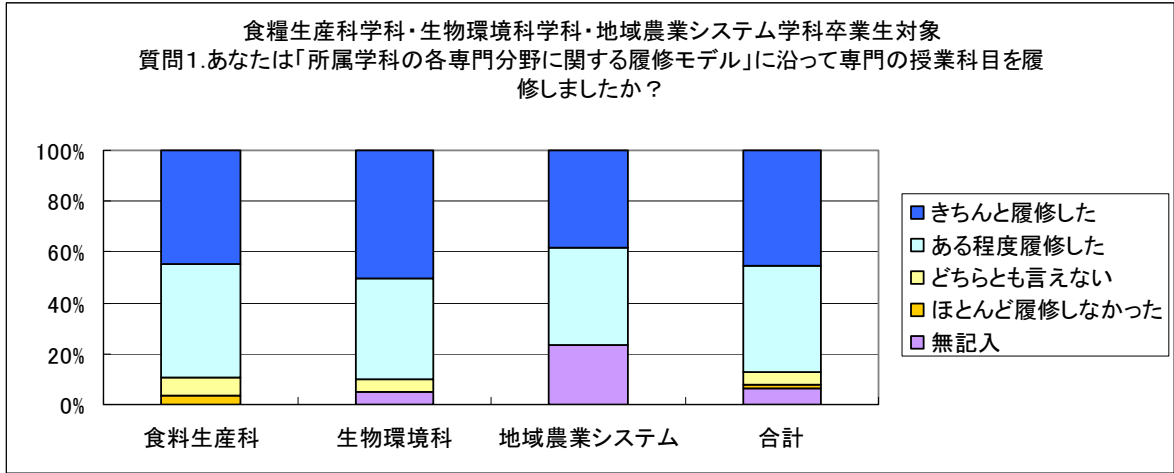
学部共通質問



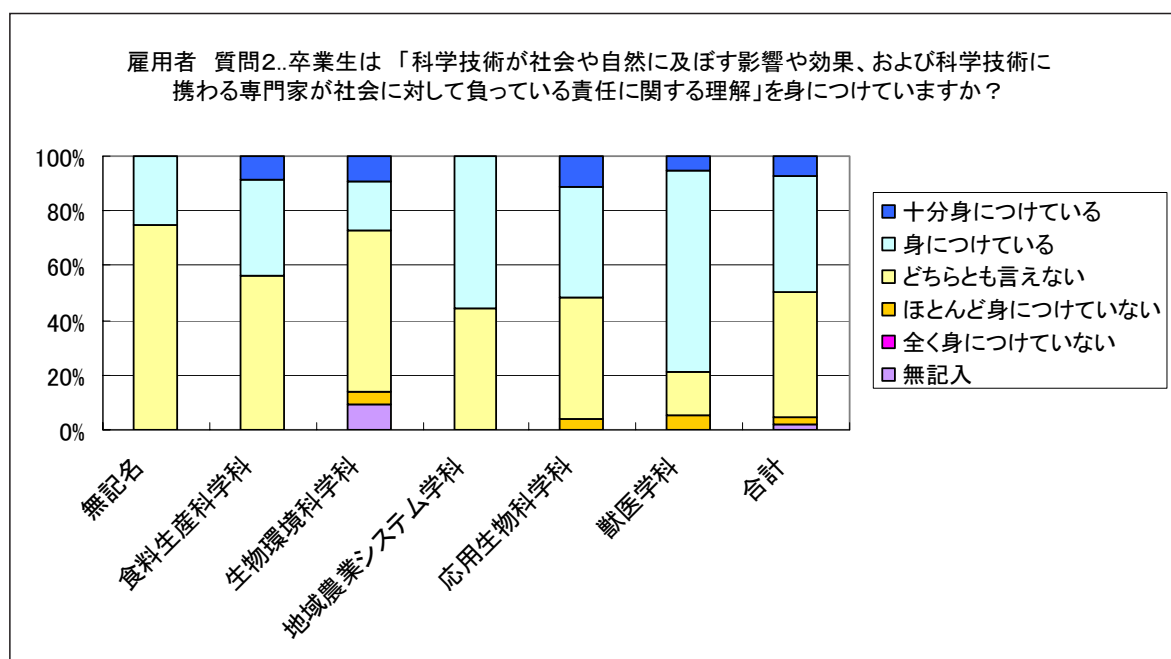
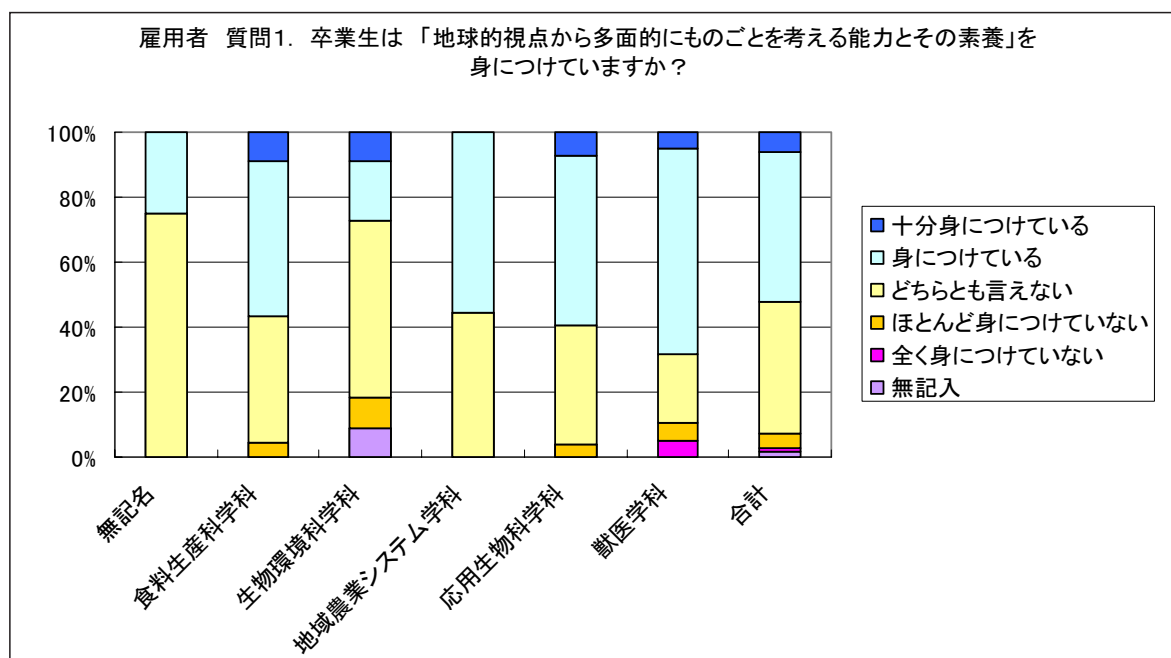
学部共通質問



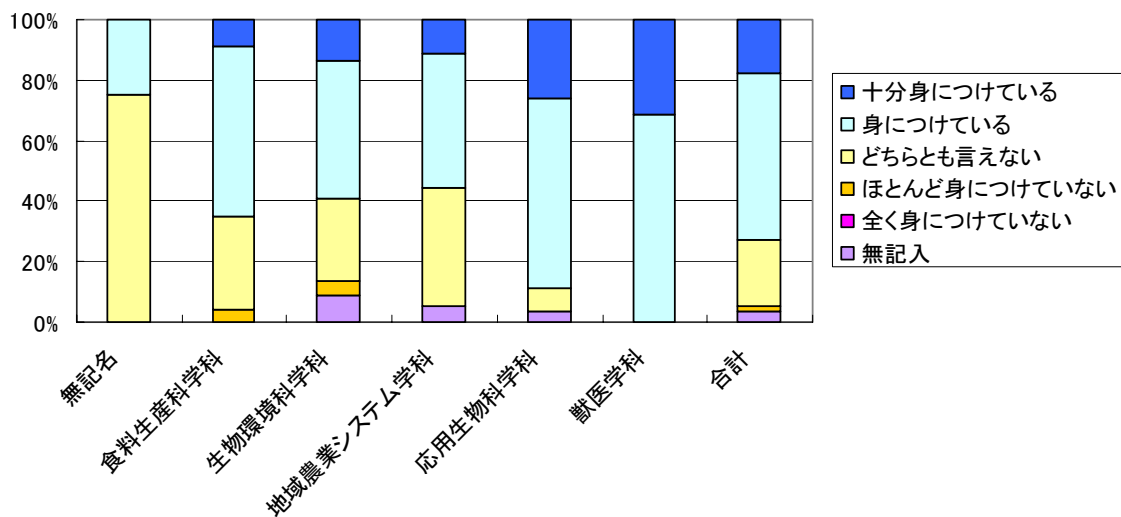
学科別質問



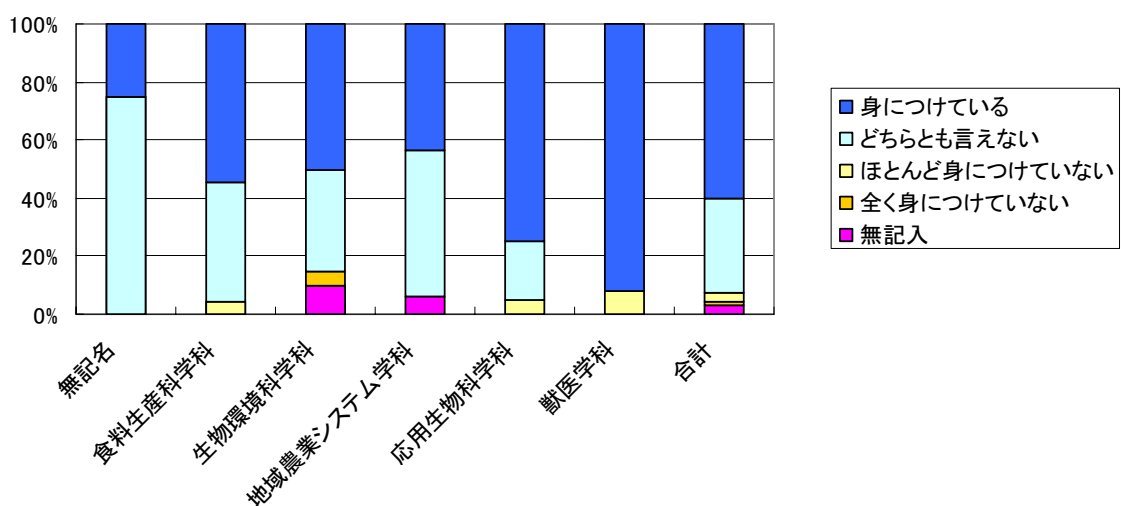
(ii) 学科別アンケート集計結果（雇用者）



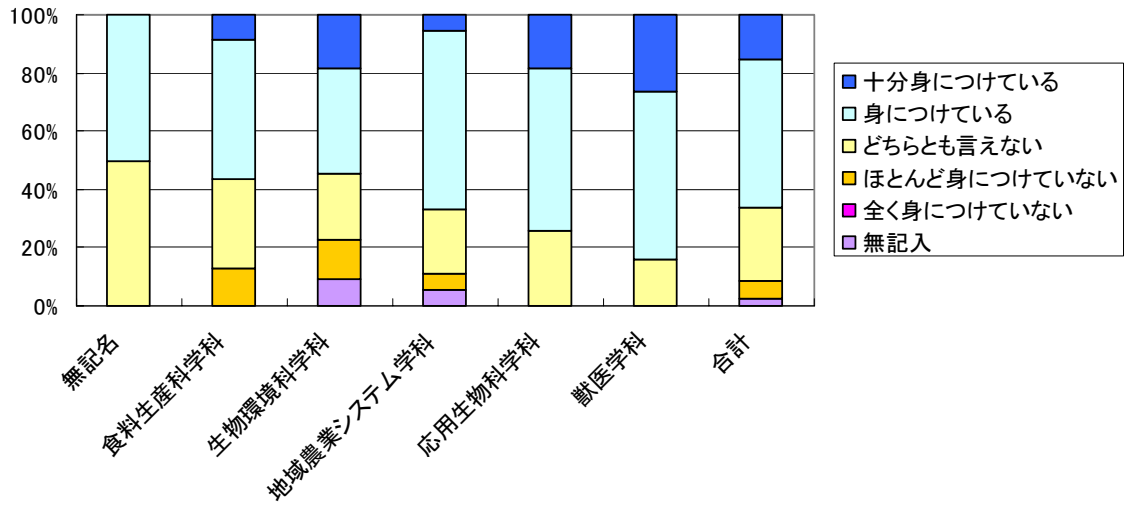
雇用者 質問3.卒業生は「食料生産科学、生物環境科学、地域農業システム学、応用生物科学、獣医学に関する基礎知識」を身につけていますか？



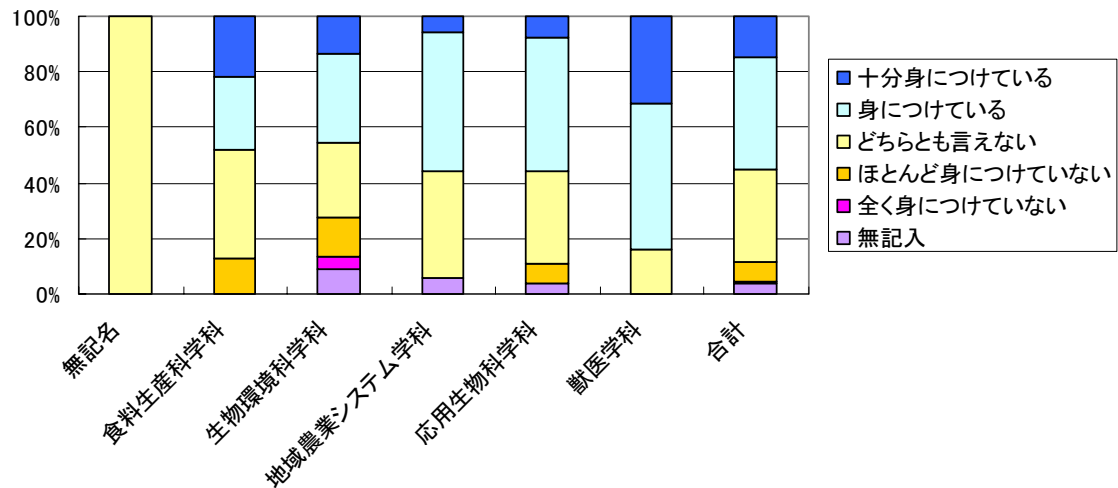
雇用者 質問4.卒業生は「食料生産科学、生物環境科学、地域農業システム学、応用生物科学、獣医学の各関連科目の修得によって得られる専門知識」を身につけていますか？



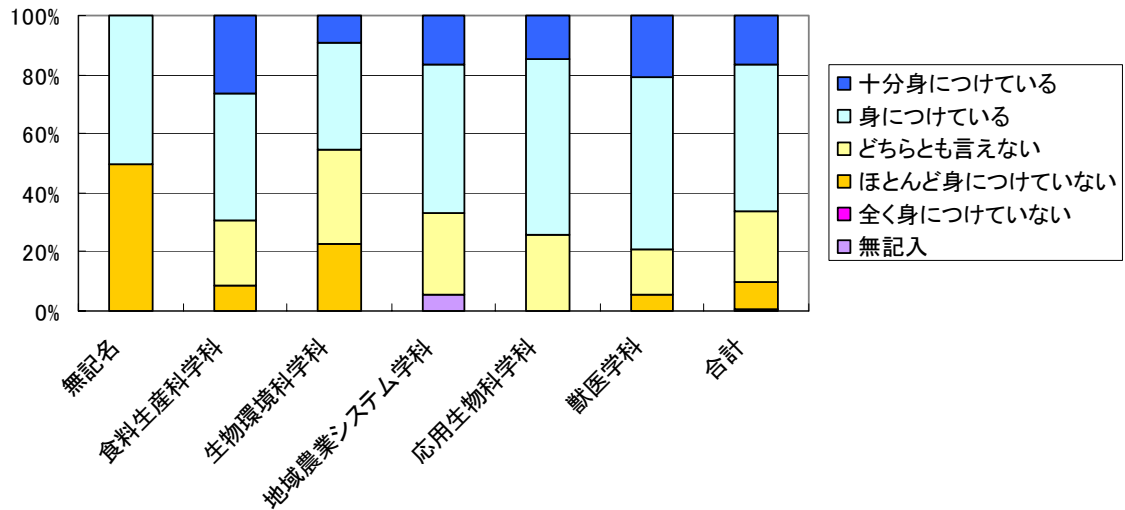
雇用者 質問5.卒業生は「実験または調査を計画・遂行し、データを正確に解析・考察し、かつ説明する能力」を身につけていますか？



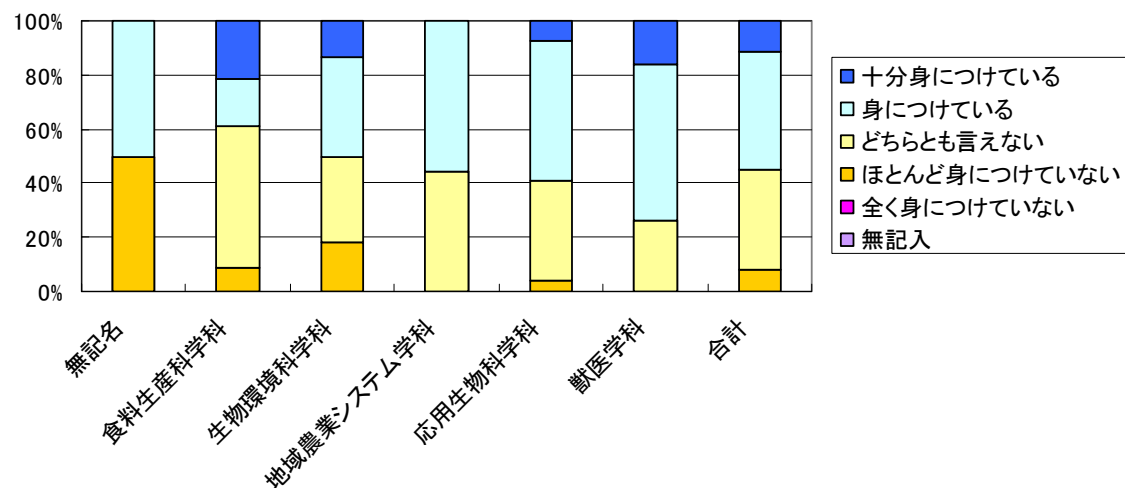
雇用者 質問6.卒業生は「専門的な知識および技術を駆使して、課題を探求し、組み立て、解決する能力」を身につけていますか？



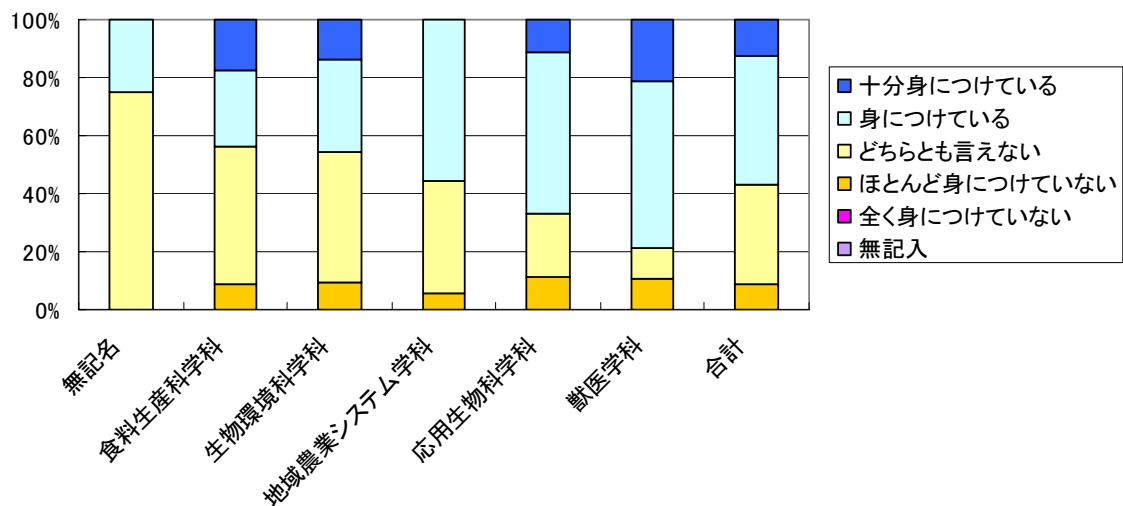
雇用者 質問7.卒業生は「実社会において経験する実務上の問題点と課題を理解し、適切に対応する能力と判断力」を身につけていますか？



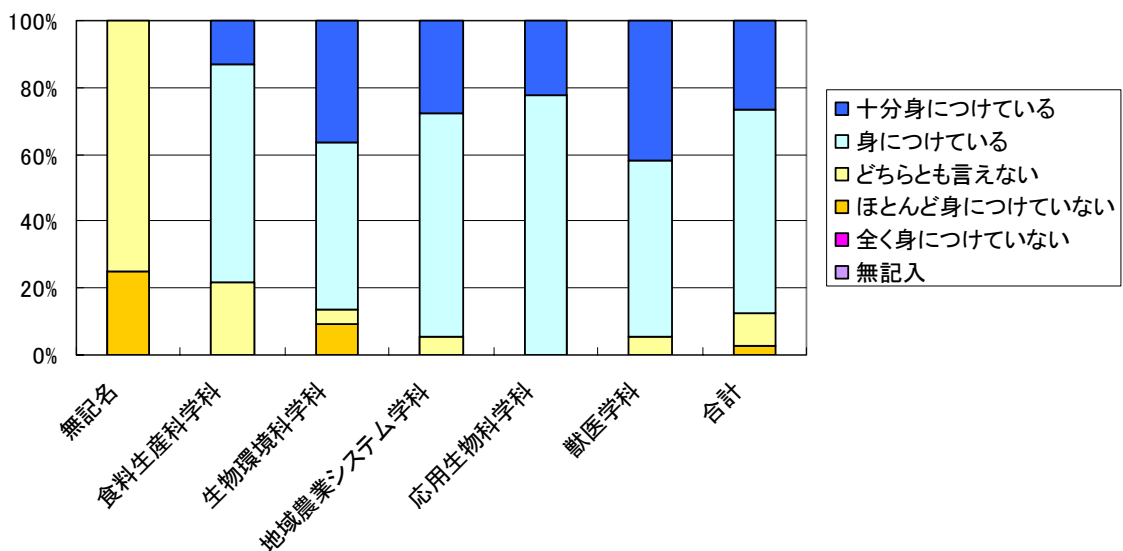
雇用者 質問8.卒業生は「社会の要求に対して様々な情報を収集・分析し、対応策を企画する能力」を身につけていますか？



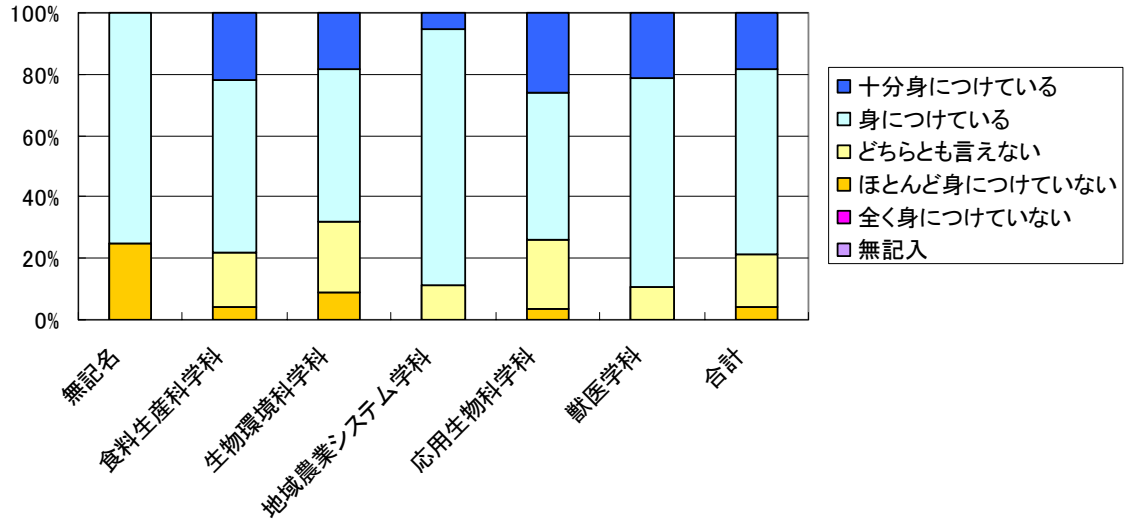
雇用者 質問9.卒業生は「日本語による論理的な記述力, 口頭発表力, 討議等のコミュニケーション能力および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力」を身につけていますか？



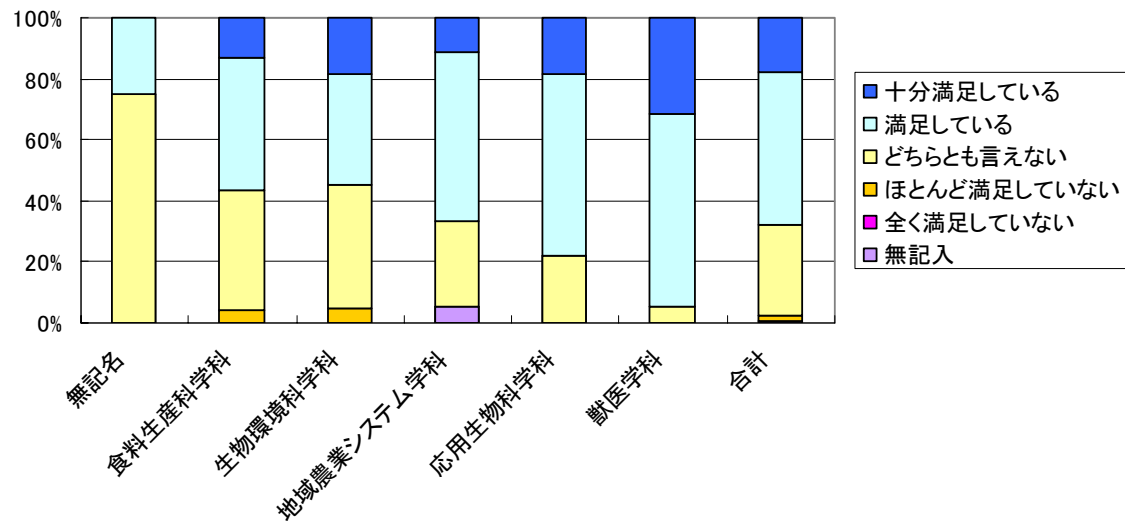
雇用者 質問10.卒業生は「自主的、継続的に学習できる能力」を身につけていますか？



雇用者 質問11.卒業生は「与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、まとめる能力」を身につけていますか？



雇用者 質問12.卒業生が宮崎大学農学部で受けた教育に対する総合評価を次の5つの中からお選びください。



(iii) 学生による回答の特記事項集計

質問14 現在の業務に生かされている科目

内 容 (集約)	学 科 別 件 数				
	食 料	生 環	地 域	応 生	獣 医
専門科目 (全般)		1		10	9
専門科目 (所属講座開講科目)		4			
専門科目 (学科開講科目以外)		1			
卒論 (パソコンスキル, 文章表現等を含む)		1		5	
学生生活全般		1		1	

質問15 今後改善すべき点

内 容 (集約)	学 科 別 件 数				
	食 料	生 環	地 域	応 生	獣 医
分野間の関連性が不明 (授業構成)		1			
フィールド教育 (実習, 学外研修) の不足		7			
口頭発表力の育成強化が必要		1			
文章力の育成強化が必要		1			
成績評価後のフォローが不十分		1			
環境系の科目が不足		5			
資格取得のための科目が不足		2			
自由選択のため専門性が希薄		2			
入学前の学科イメージとの乖離		3			
科目数全体の不足		1			
教養教育不要				1	
英語教育の充実				1	
情報リテラシー教育の充実				2	
卒業研究への早期取組み				1	
コミュニケーション能力 (社会性, 協調性) 向上のための教育の充実				1	
臨床教育の充実					6
国際的な獣医学教育の実施					1
第三者による授業評価の実施					1

(iv) 雇用者による回答の特記事項集計

質問13 改善すべき点

内 容 (集約)	学 科 別 件 数				
	食 料	生 環	地 域	応 生	獣 医
コミュニケーション能力		1		3	
社会人としての心構え（社会性・協調性）の教育		3			
社会（就業）経験		1		1	
教育内容・他大学と比較した特色の明確化と地域住民への広報活動		1			
応用力，課題探求・組み立て能力		2			
企画立案能力		1			
ミスマッチの発生				2	
就職活動の出遅れ				1	
メンタルヘルスケアの充実				1	
大学は幅広い基礎知識を身につけさせればよい。				1	
継続的な人間性育成（現状の卒業生の人柄が良いため）					3
課題解決能力の育成の徹底					1
広い視野を持って思考する能力の育成					1
責任感・向上心の育成					1
大動物獣医師の供給					1
学外実習の機会の増加					1